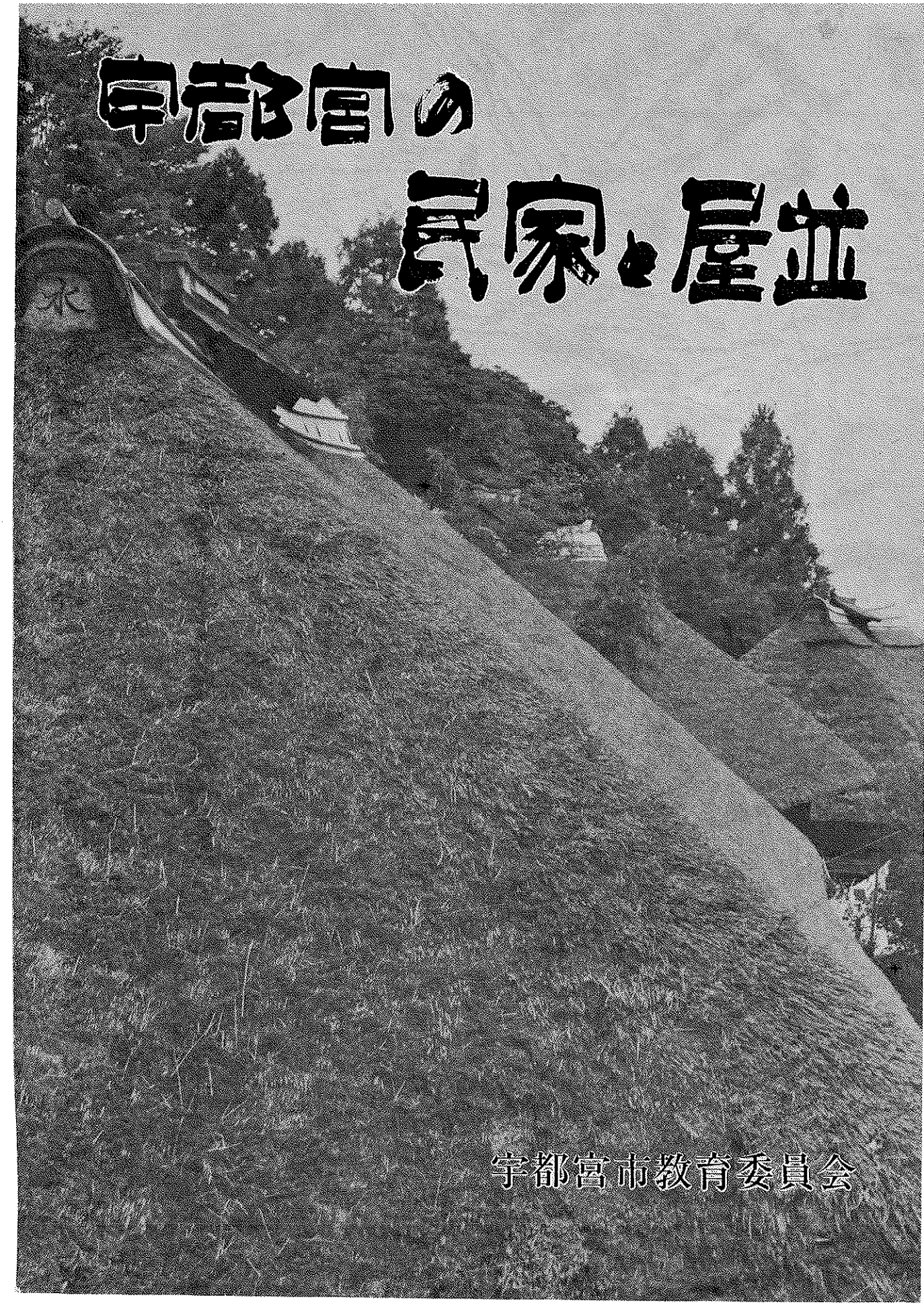


宇都宮の民家と屋並

宇都宮市教育委員会

表紙写真

宇都宮市瓦谷町

（上の島地区）

文化財シリーズ第2号

宇都宮の民家と屋並

昭和54年3月

宇都宮市教育委員会

序　　文

私たちの郷土「宇都宮」は、城下町から発展してきた町です。

したがって、街角には本来もっと城下町の面影を残していなければならないはずなのです。

しかし、不幸にして明治維新の戊辰の役と第２次世界大戦は、市街地の伝統ある町並景観をほとんど破壊してしまいました。

さらに、戦禍を免れた数少ない家屋も、減少しつつあります。

市の周辺部についてみても、高い草屋根の農家は建てかえられたり、改造され消失の一途をたどっていることは、皆さんの周知するところです。

そこで、本教育委員会では、市内に現存する古民家の概要を把握するため、昭和52年度「建造物（古い家屋）の調査」を実施しました。

今回、発刊いたすことになりました「宇都宮の民家と屋並」は、この調査の報告の一部であり、私たちが忘れ去ろうとしている伝統ある郷土の家屋を再認識していただくための資料なのです。

私たちの郷土「宇都宮」を、より深く理解するための一助に本冊子が役立つならば幸いに存じます。

終りに、本冊子を刊行するにあたり調査・編集の仕事を引き受けてくださった、本市文化財調査員各位並びに御協力いただきました関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和５４年３月

宇都宮市教育委員会

教育長　後藤一雄

目　　次

序　　文　宇都宮市教育委員会教育長――――後藤一雄
発刊に際して　宇都宮市文化財保護審議委員会委員長――――小林友雄
まえがき――――5
Ⅰ、旧街道沿いの商家――――6
　1、旧城下町の商家……7
　2、宿場町の商家……14
Ⅱ、周辺部の農家――――19
　1、集落の景観……20
　2、屋敷構え……21
　3、母屋の外観……22
　4、母屋の部分……25
Ⅲ、門と蔵――――34
　1、堂々とした門構え……34
　2、富を象徴した蔵……37
Ⅳ、その他代表的建物――――39
あとがき――――43

文化財愛護シンボルマークについて

このマークは文化財愛護運動の一環として昭和41年5月に定められたもので、ひろげた両方の手のひらのパターンによって日本建築の重要な要素である斗供のイメージを表わし、これを3つ重ねることにより文化財という民族の遺産を過去・現在・未来へと永遠に伝承していくという愛護精神を象徴したものです。

発刊に際して

宇都宮市文化財保護審議委員会

委員長　小林友雄

本書は、昭和52年度に市文化財調査員諸氏の活動の一つとして調査をお願いした「建造物（古い家屋）の調査」を基礎にしてまとめたものである。

近年の急激な社会構成の変化は、全国的なものであり、わが郷土「宇都宮」もその波を受け伝統的な生活様式を消失しつつある。

我々の生活に欠くことのできない家屋も、最近は著しくその形を変えてしまい、旧来から残され、見なれていた家屋や町並が急速に姿を消しつつある。

本書は、これ等の失なわれつつある景観を記録しようと試みたものであり、郷土の姿の一端を知る手がかりになると考えている。

なお、本書が、より多くの人々の目にとまり、「家」というものを再認識するだけでなく関心を高め、今後の文化財保護行政の一助となることを願っている。

昭和５４年３月

ま　え　が　き

本冊子は、昭和52年度、宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け、市文化財調査員活動の一環として実施した「建造物（古い家屋）の調査」の結果をふまえて、写真集形式をとってまとめたものです。

調査の結果、報告された建造物は、150数件に及んだため、編集にあたっては「調査票」の建築年代、改造の有無その他家屋の概要を検討して掲載しました。

編集に関する仕事は、調査も担当した下記の市文化財調査員のうち※印の各位と市教育委員会社会教育課の職員があたりました。

●宇都宮市文化財保護審議委員会委員

小林友雄（委員長）
辰巳四郎（委　員）
福島悠峰（　〃　）
森谷　憲（　〃　）
谷田部康幸（　〃　）
富　祐次（　〃　）53．10－新任－
野中退蔵（副委員長）
葭田真斎（委　員）53.5－故人－
岩崎良能（　〃　）
雨宮義人（　〃　）
塙　静夫（　〃　）

●宇都宮市文化財調査員

※黒川孝三（一　条）
加藤康照（　旭　）
石川秀男（陽　西）
松本文一郎（陽　東）
菊地正仁（平　石）
直井茂吉（清　原）
※坂寄悦男（瑞穂野）
半田　勝（国　本）
福田　操（富　屋）
松本笑悦（姿　川）
粂川弘明（宮の原）53．10－新任－
塚田賢照（陽　北）
内藤二郎（陽　南）
釜井宗一（星が丘）
※平塚良雄（泉が丘）
※阿久津義正（宮の原→篠井）
増渕藤四郎（横　川）
小堀時蔵（豊　郷）
高山伝治（城　山）
金田要作（篠　井）53.9－辞任－
寺内弥三郎（雀　宮）

〔※印は編集員、（　）内は担当区域〕

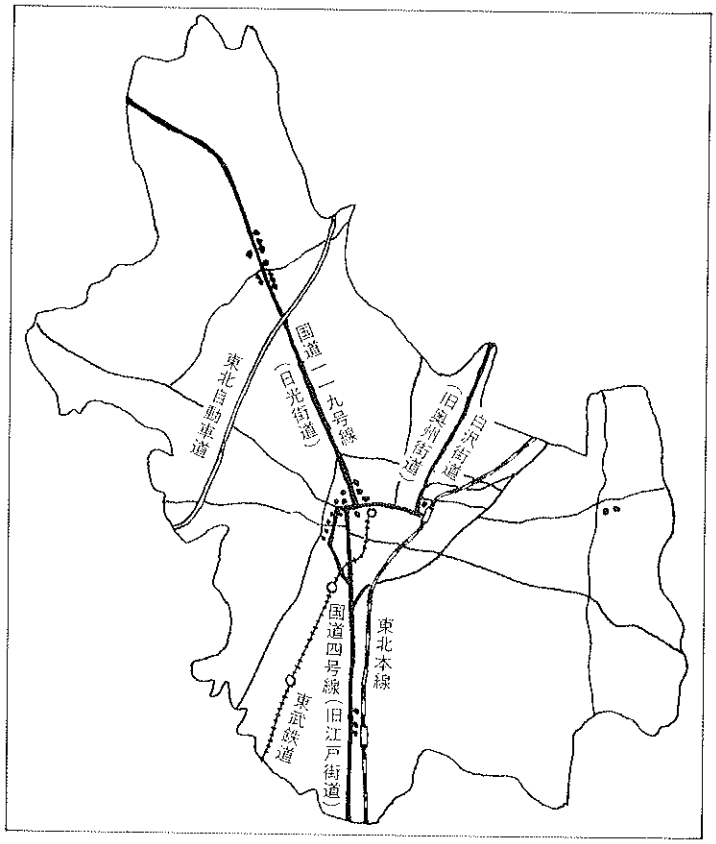
●宇都宮市教育委員会社会教育課職員

◎半田　昭（社会教育課長）
○定岡明義（文化振興係）
松沢清一郎（　〃　）
河越昌司（文化振興係長）
桜井敬朔（文化振興係）

〔◎印は編集責任者、○印は編集主任〕

Ⅰ、旧街道沿いの商家

古い商家がみられる地区　　Ⅰ－①



平安時代末以後、宇都宮は、22代にわたって宇都宮氏の支配が続き、宇都宮城が築かれてからは、二荒山神社の門前町としてだけでなく城下町としても栄えるに至った。

江戸時代になると、日光東照宮が建立され奥州・日光街道の分岐点として重要さを加えると共に、奥平・本多・松平・戸田氏等の城下町として繁栄を続けてきた。

しかし、宇都宮は戊辰の役と第２次世界大戦の２回にわたって戦禍をうけ、宇都宮城をはじめ城下町の景観もほとんど焼失してしまった。

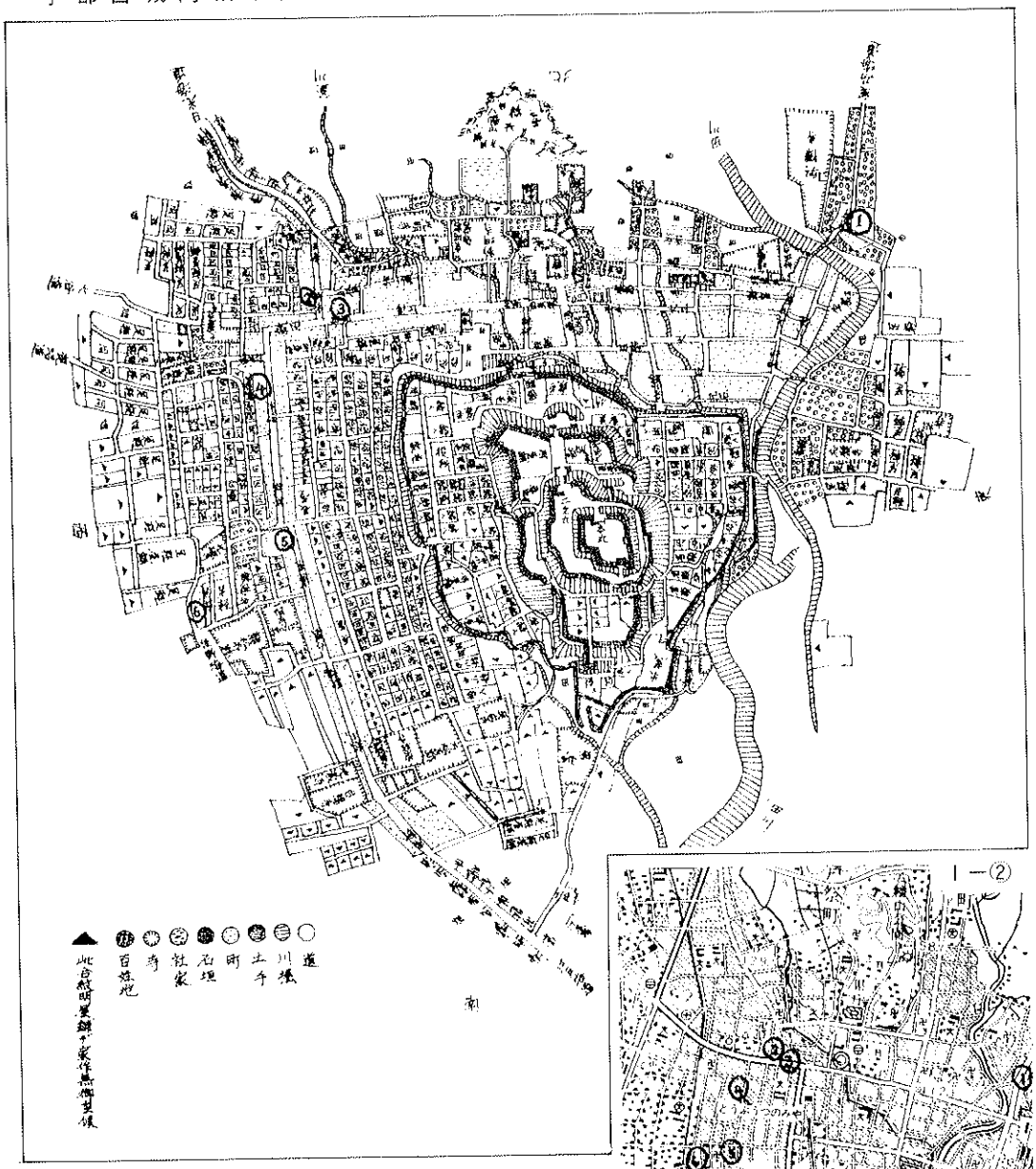
それでも、宇都宮には屈曲した道路や町割り、あるいは町名等に城下町の名残りを止めており、建造物も江戸時代の町屋ではないかと思われるような古い造りの商店が所々に見られる。

蔵造りや格子造り風の商家が現存している地区は、市街地では宇都宮城下の町人居住地区であった材木・清住・伝馬・博労・大寛町等であり、市の周辺部では宿場町であった徳次郎町や雀宮町である。

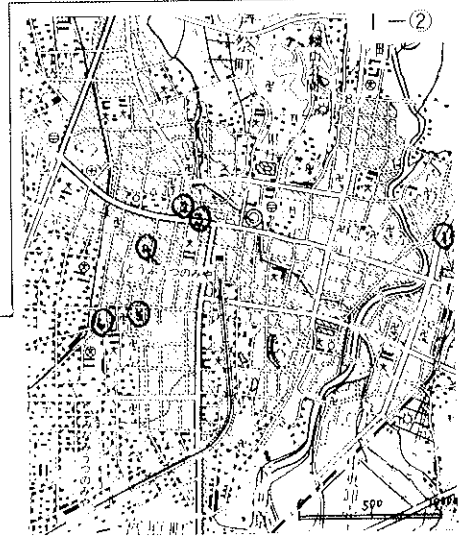
これ等古い造りの商家が残る地区は、市の中心部、周辺部とも旧街道沿いにあり、町割りが計画的になされたことを物語るだけでなく、往時の町のようすをしのぶことができる。

1、旧城下町の商家

宇都宮城内城下図　　1－①



1－②

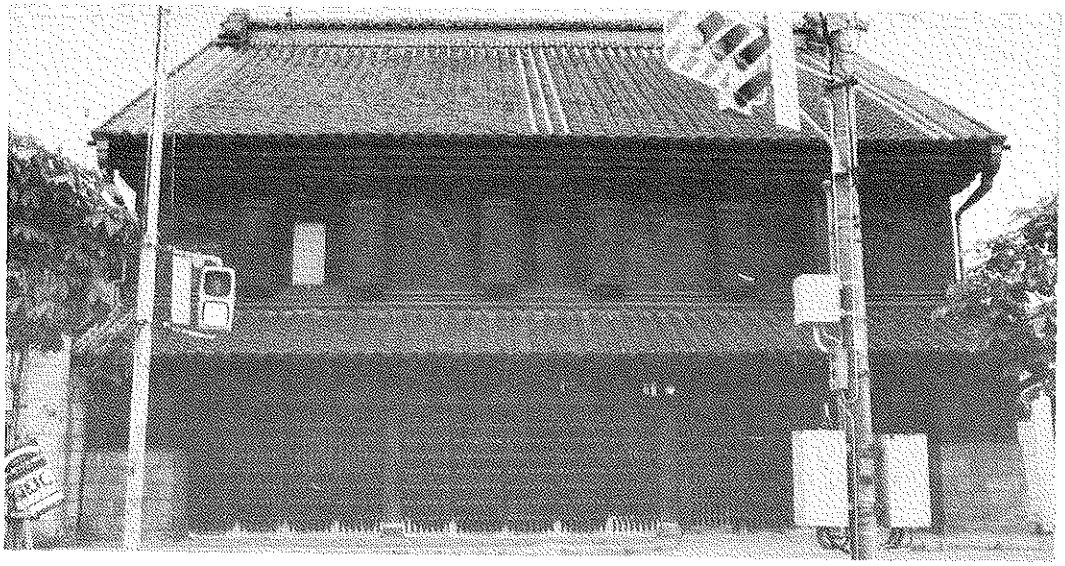


① 博　労　町　② 旧本郷町
③ 伝　馬　町　④ 材　木　町
⑤ 旧蓬莱町　⑥ 六　道　町

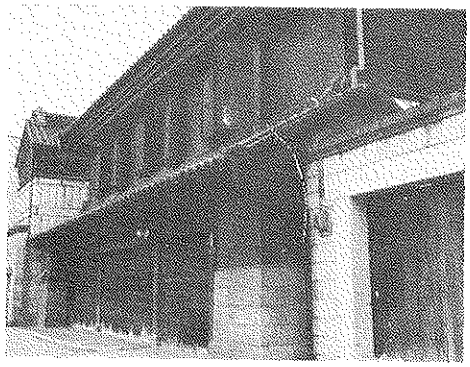
(1) 博労町付近

宇都宮城下の北東、奥州街道の入り口に位置する博労町付近は国鉄宇都宮駅に隣接しており開発が進んでいるが、交差点の東側に「土蔵造り（蔵造り）」の店舗があり、かつての商家の一型態を知ることができる。

黒塗りの蔵造り　Ⅰ－(1)－①

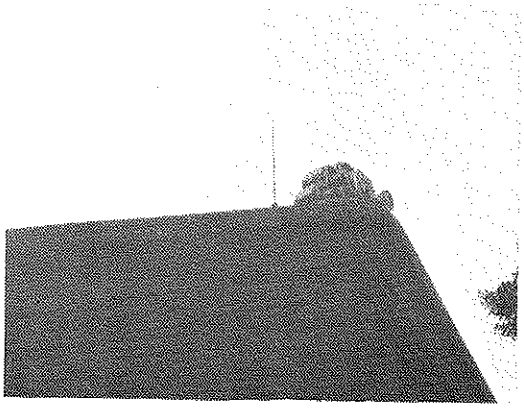


南から望む　Ⅰ－(1)－②

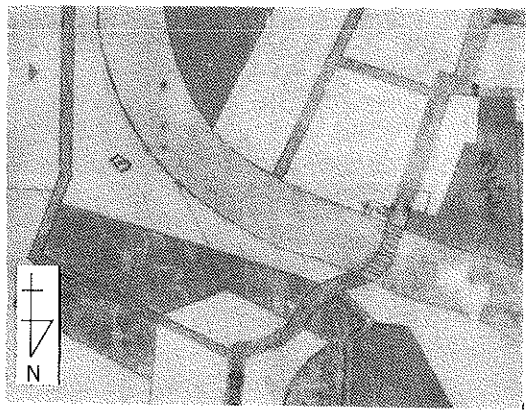


北から望む　Ⅰ－(1)－③

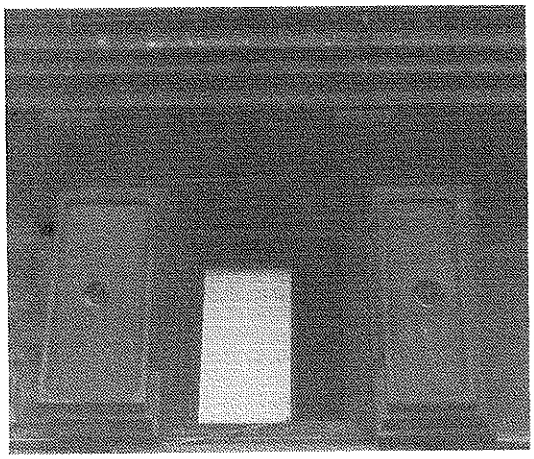
豪荘さを象徴する鬼瓦　Ⅰ－(1)－④



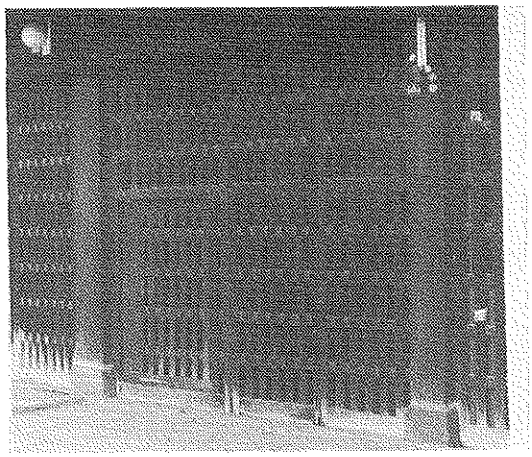
古地図にみえる博労町付近　Ⅰ－(1)－⑤



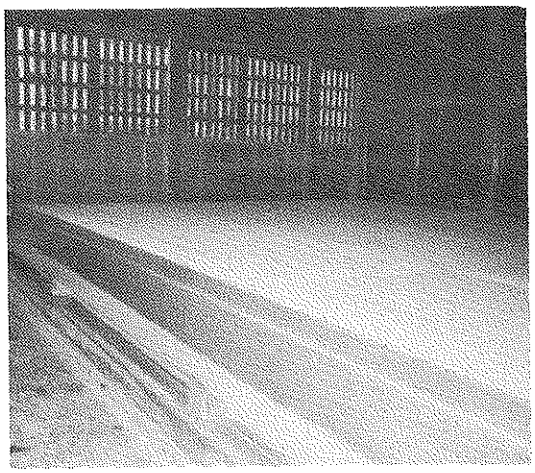
重厚な観音開きの窓　Ⅰ―(1)―⑥



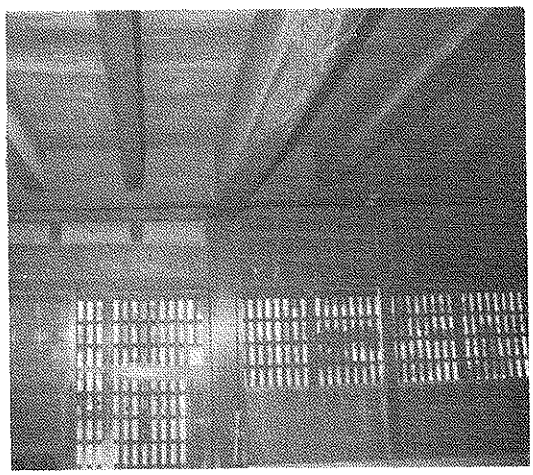
問屋格子とくぐり戸　Ⅰ―(1)―⑦



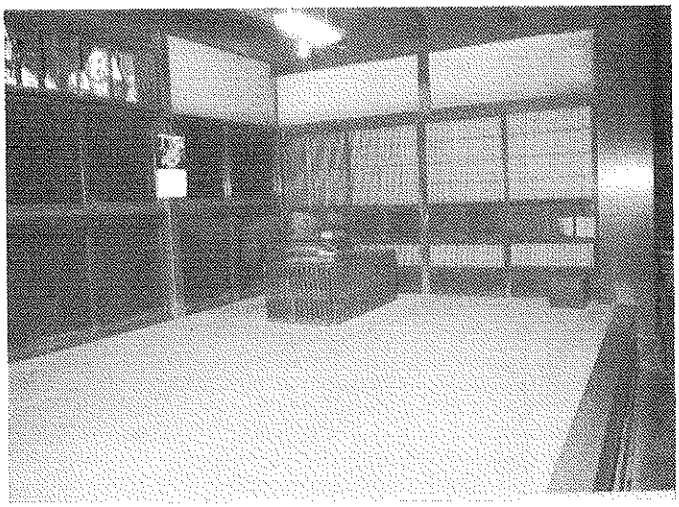
桜材で縁取りされた帳場　Ⅰ―(1)―⑧



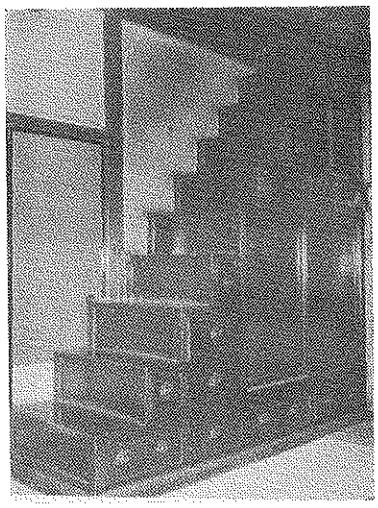
見事なケヤキと赤松材による梁（はり）　Ⅰ―(1)―⑨



二階まで通っている大黒柱と帳場のようす　Ⅰ―(1)―⑩



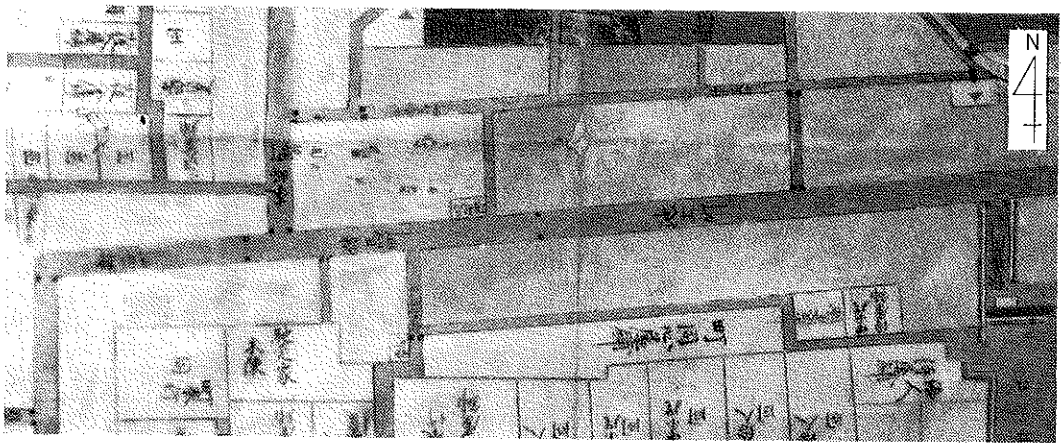
茶の間の箱階段　Ⅰ―(1)―⑪



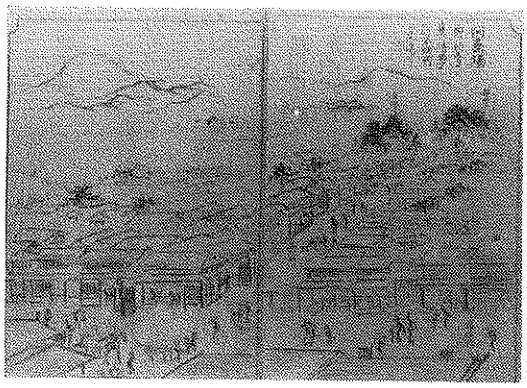
(2) 伝馬町・旧本郷町付近

伝馬町・旧本郷町付近一帯は、日光と奥州への分岐点に位置し、交通の要所として栄えた町であり、今日も古い造りの商家が所々に見られる。

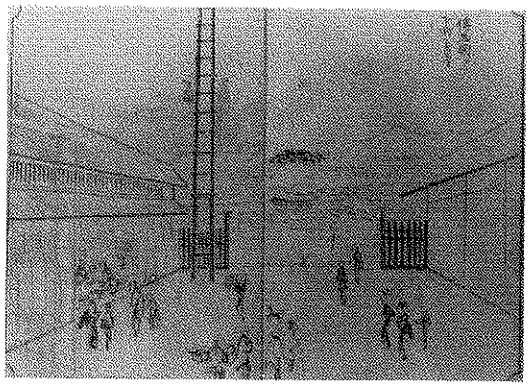
古地図にみえる伝馬・本郷町付近　Ⅰ—(2)—①



古書にみえる本郷町付近　Ⅰ—(2)—②



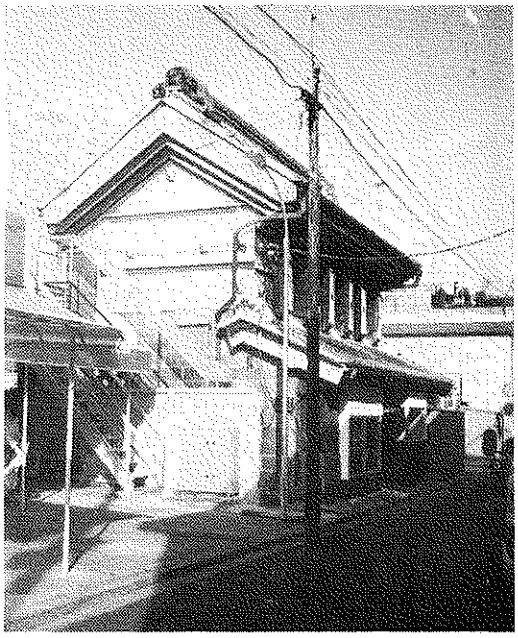
同　伝馬町付近　Ⅰ—(2)—③



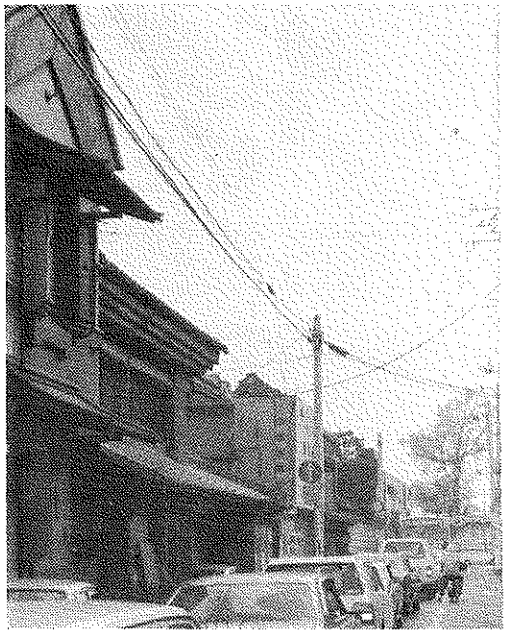
ビルの谷間にたたずむ商家　Ⅰ—(2)—④

改造された蔵造り風の商家　Ⅰ—(2)—⑤

旧小伝馬町に残る蔵造りの商家　Ⅰ―(2)―⑥



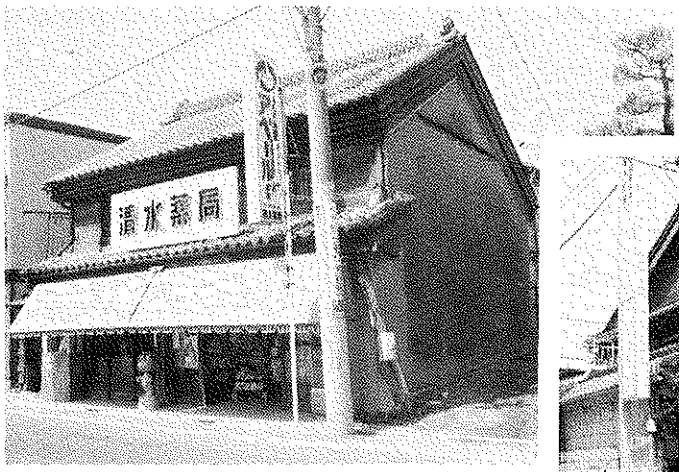
古い町並を残す旧本郷町　Ⅰ―(2)―⑦



(3)　材木町付近

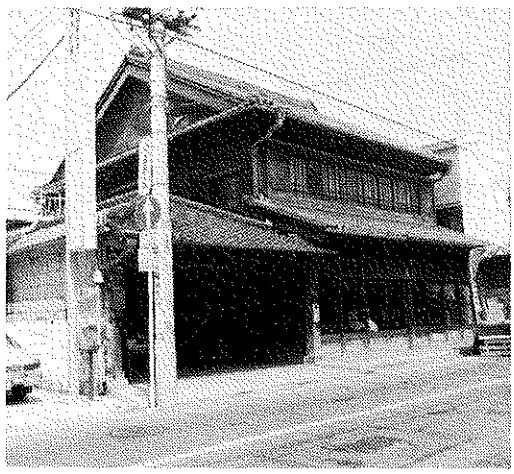
城下町の特色の一つに、職種に結びついた町名がみられるが、材木町もその一つであり、今でも数軒の古い型態を残した商家が存在する。

美しい瓦屋根の商家　Ⅰ―(3)―①



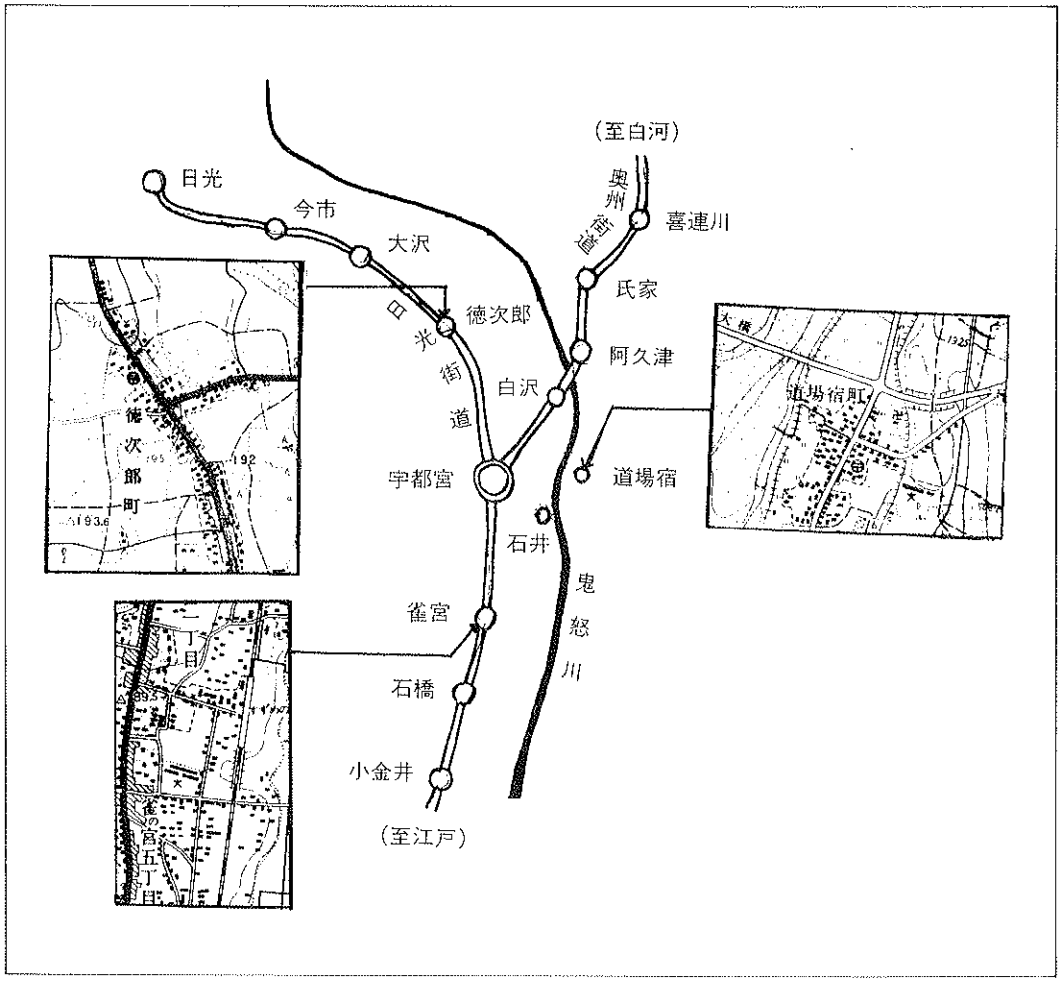
見事な軒桁（のきげた）のみえる商家

Ⅰ―(3)―②



2、宿場町の商家

宇都宮の旧宿場町　　2－①



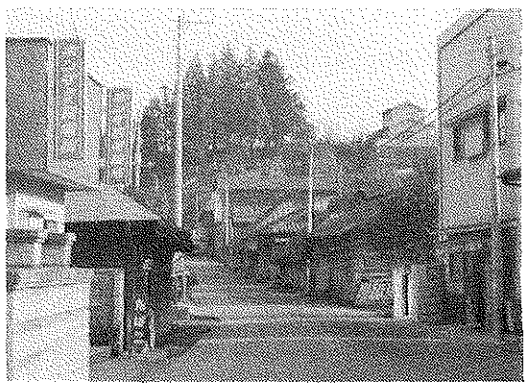
(1)　道場宿付近

清原地区の道場宿は、旧水戸街道の宿場として発展した町である。

特に江戸時代には、鬼怒川の渡船場として重要な位置をしめるに至った。

現在は、新水戸街道の設置により往時の繁栄のようすをしのぶことができないが、宿場町の景観は名所に残っている。

宿場の景観が残る坂道　　2－(1)－①

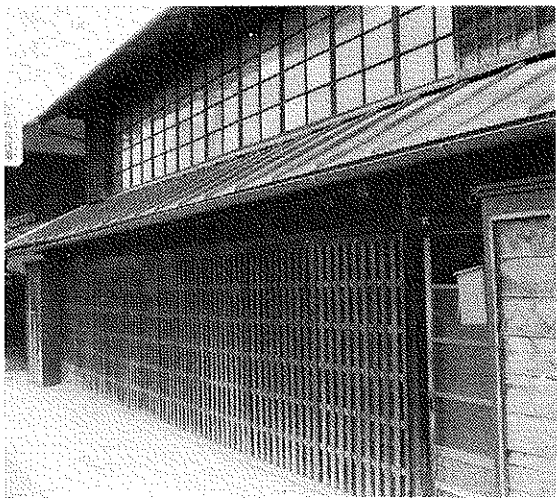


(2) 雀宮付近

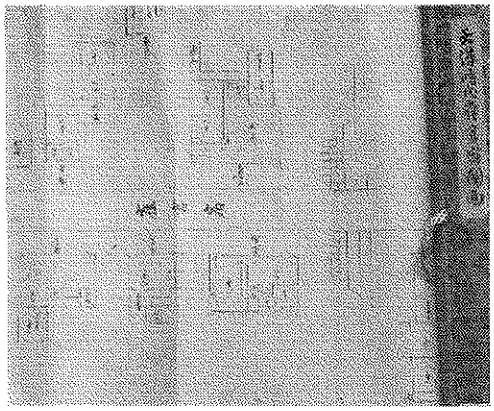
雀宮は、宇都宮への入口の宿として旅籠(はたご)が軒を並べ、多くの旅人が通行し大いににぎわったという。

現在は、宿の中央を国道4号線が通過しており、自動車ラッシュで有名になっているが、道路沿いに昔のおもかげを残す格子造りの家や脇本陣などが残っている。

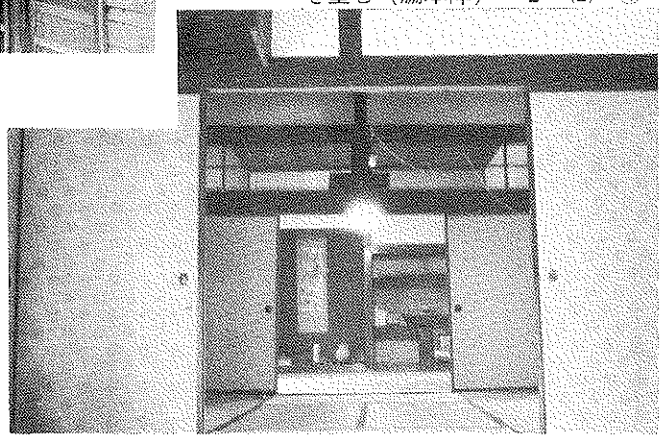
宿の景観を止める格子造りの家　2－(2)－①



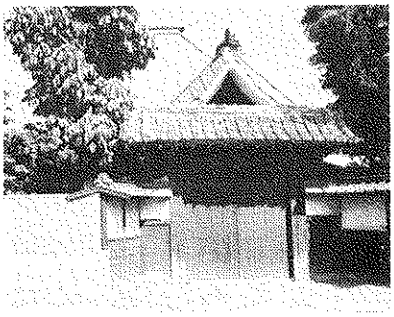
雀宮宿図面　2－(2)－②



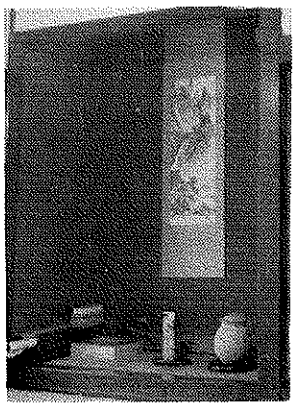
大広間から次の間上段の間を望む（脇本陣）　2－(2)－④



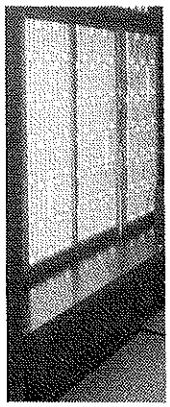
風格のある脇本陣　2－(2)－③



床間（脇本陣）　2－(2)－⑤



附書院（脇本陣）　2－(2)－⑥



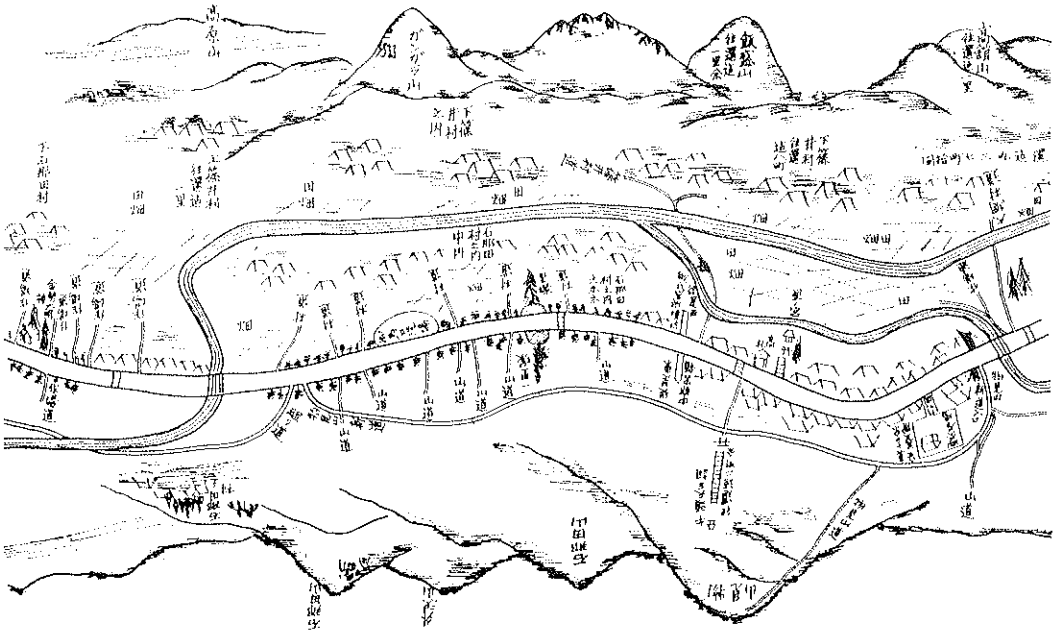
上段の間の脇廊下の板戸（脇本陣）　2－(2)－⑦

(3) 徳次郎付近

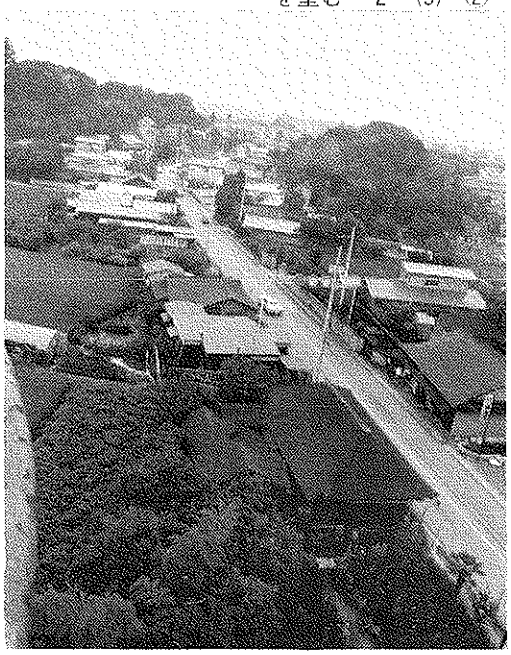
日光街道沿の宿場町であった徳次郎は、上・中・下に分かれている。

いずれも間口は狭いが奥行が深い宿場町独特の地割りが見られるだけでなく、現在も町並の中に格子造りの軒の低い商家が残っており往時をしのぶことができる。

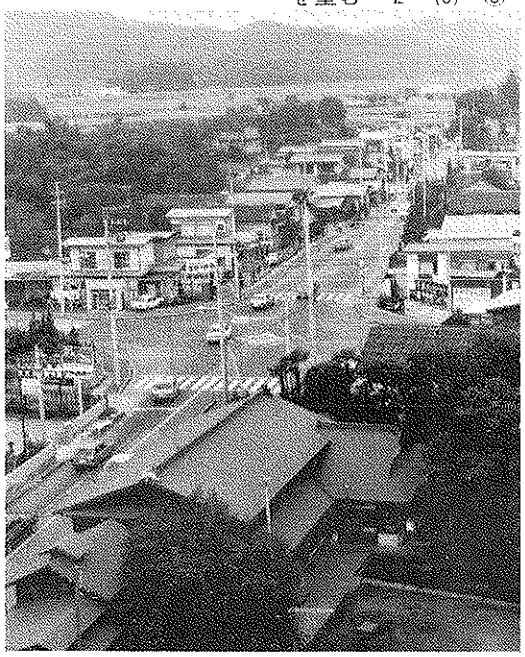
日光街道図（上徳次郎方面）　2－(3)－①



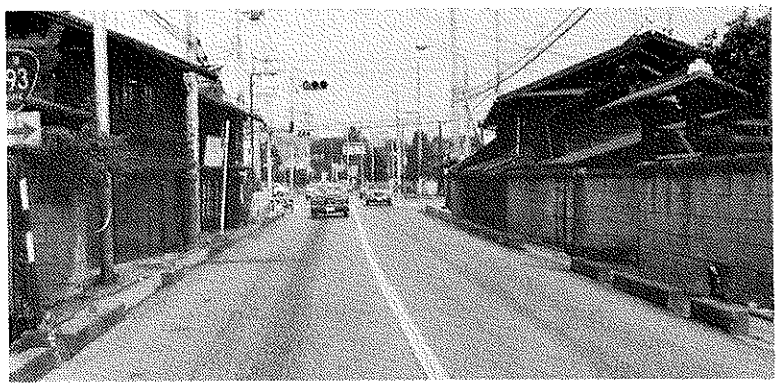
中徳次郎から下徳次郎方面（南）を望む　2－(3)－②



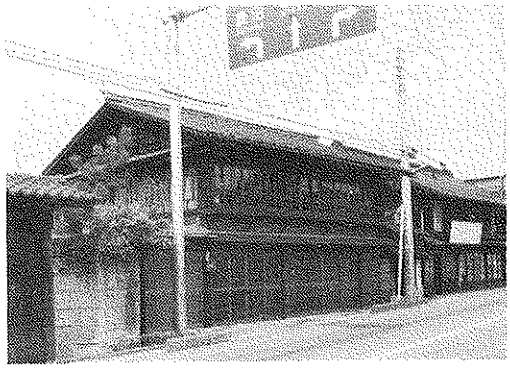
中徳次郎から上徳次郎（北）を望む　2－(3)－③



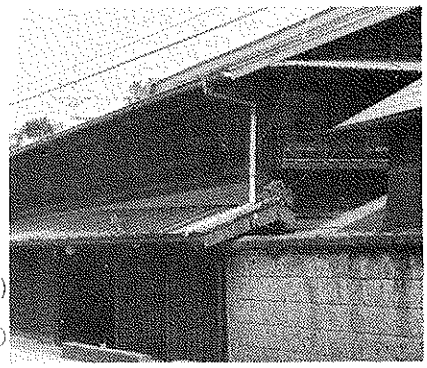
中徳次郎の軒並　2－(3)－④



軒の低い二階造りの家屋　2－(3)－⑤

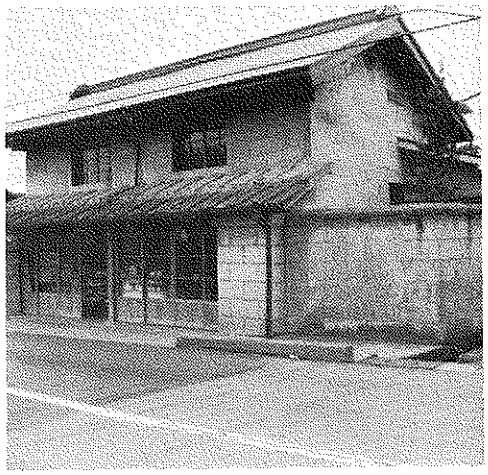


総格子の造り酒屋　2－(3)－⑥

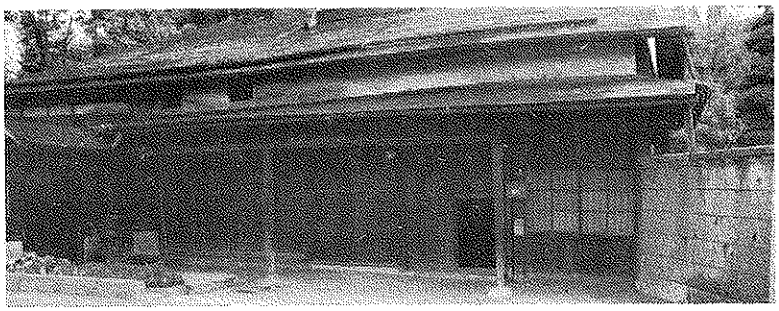


石造りの町屋風の家　2－(3)－⑦

大谷石造りの商家　2－(3)－⑧



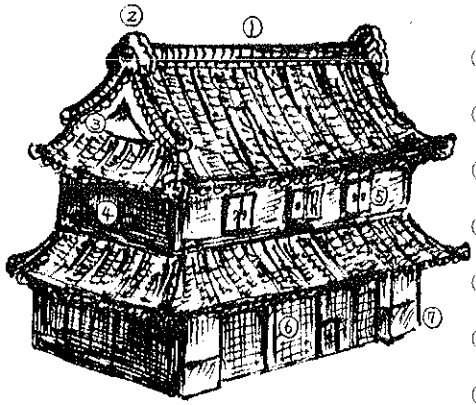
大戸にくぐり戸のある古い商家　2－(3)－⑨



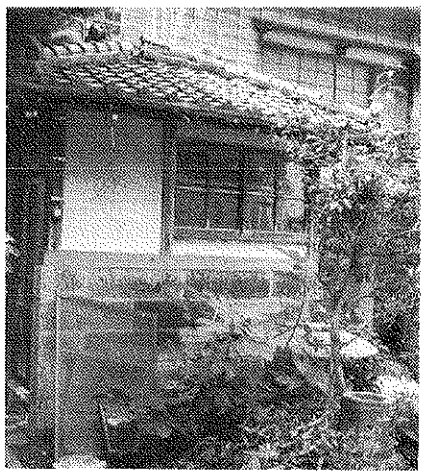
Ｉの注

- Ｉ－①　この「宇都宮城下図」は、延命院所蔵（泉町４）の城下図を書き写したものである。
  なお原図は、たて 177cm よこ 178cmである。
- Ｉ－②　５万分の１地形図「宇都宮」より。
- Ｉ－(1)－①②、③、④⑥、⑦、⑧⑨、⑩、⑪　篠原氏宅（博労町631）
- Ｉ－(1)－⑤　Ｉ－(2)－①　Ｉ－(4)－①　延命院所蔵（泉町４）「宇都宮城下図」より
- Ｉ－(2)－②、③　Ｉ－(4)－②　Ｉ－(5)－②、⑤　高橋氏所蔵（大通り５－－２）「宇陽略記」のさし絵より。
- Ｉ－(2)－④　小野崎氏宅（泉町６）
- Ｉ－(2)－⑤　渡辺氏宅（伝馬町４）
- Ｉ－(2)－⑥　菊地氏宅（泉町７）
- Ｉ－(3)－①　清水氏宅（大寛１－１）
- Ｉ－(3)－②　中村氏宅（材木町２）
- Ｉ－(4)－④　相良氏宅（大寛２－２）
- Ｉ－(4)－⑤、⑥、⑦　新村氏宅（西原１－１）
- Ｉ－(5)－④　高橋氏宅（西原１－５）
- ２－①　切地図３件とも５万分の１地形図。
- ２－(2)－②　芦谷氏所蔵（雀宮３－306）
- ２－(2)－③④、⑤、⑥⑦　芦谷氏宅（雀宮３－306）
- ２－(3)－①　「富屋村史」（福田操著）より
- ２－(3)－⑥　小堀氏宅（徳次郎町2256）
- ２－(3)－⑦　金田氏宅（徳次郎町118）
- ２－(3)－⑧　高橋氏宅（徳次郎町2221）
- ２－(3)－⑨　相羽氏宅（徳次郎町2229）

蔵造りの名称



①箱　棟
②鬼　瓦
③入母屋
④黒塗り壁
⑤観音開き
⑥格子戸
⑦腰　巻



湯　殿（田野氏宅・小幡Ｉ－３）

II、周 辺 部 の 農 家

宇都宮の農家の多くは、昭和32年に合併した新市域に集中しており、市の中心地域からは消失しつつある。

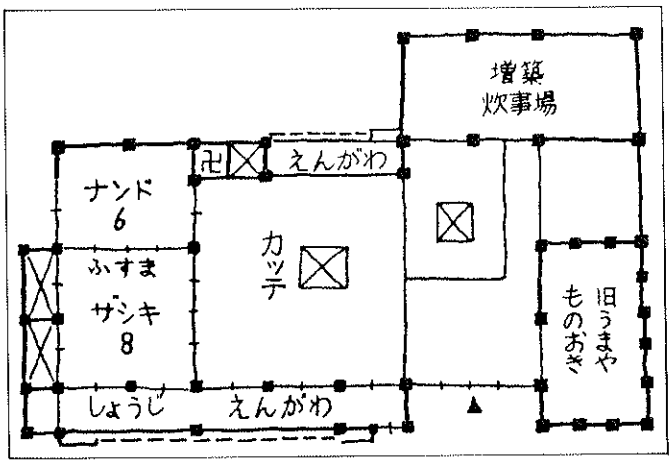
新市域に残る農家も、年々減少の一途をたどり、現存しているものも内部を改造したり屋根をトタンでふき替てしまったものが多く、建造時のままの姿をとどめているものは数えるほどしかみあたらない。

宇都宮の農家の屋根についてみると、ほとんどが寄棟で、かつては茅(かや)によってふかれていた。

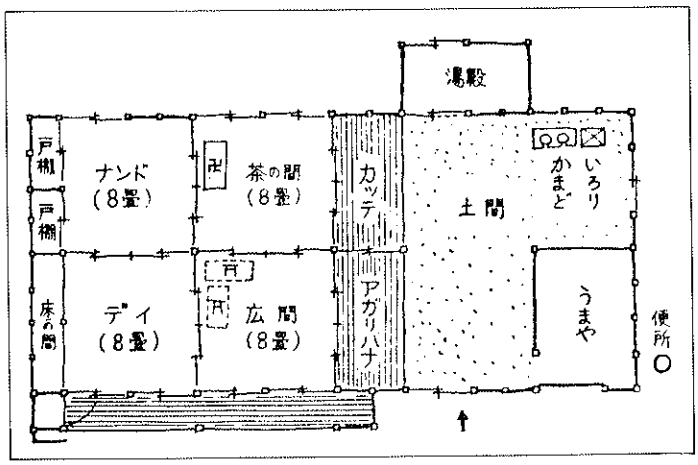
間取りは、「広間型」と呼ばれるひときは広い部屋（チャノマとかカッテと呼ばれている）が存在する東北型の間取りと西南日本型といわれている。ほぼ同じ広さの4部屋が配列する「整形間取り田の字型」とが見られる。

栃木県は、北部が「広間型」、南部が「田の字型」の間取りが多く、県の中央部は両者が混在しているといわれており、本市の場合も二つの間取りの混在地域になっている。

「広間型」間取り　II－①



「田の字型」間取り　II－②

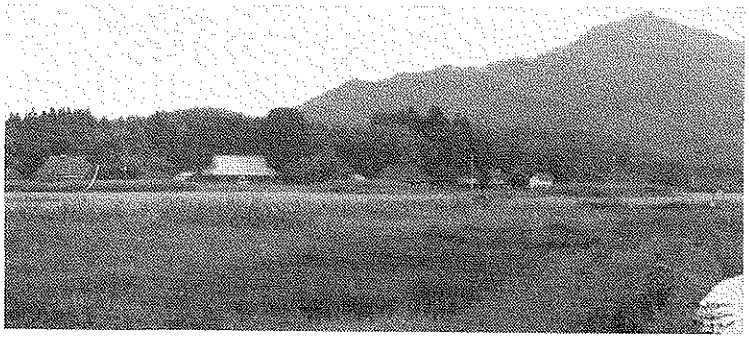


1、集落の景観

(1) 山ぎわの集落

〔1〕

(1)-①



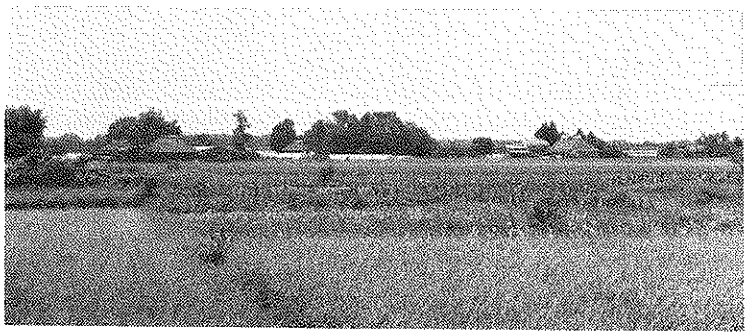
〔2〕

(1)-②

(2) 平地の集落

〔1〕

(2)-①



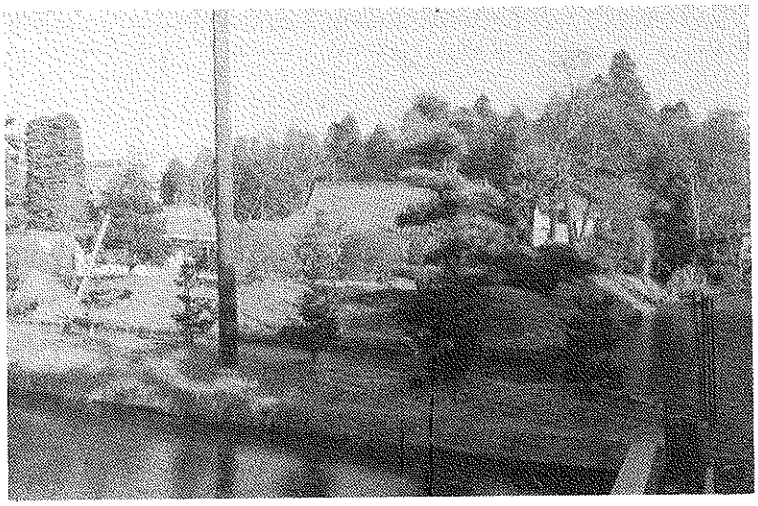
〔2〕

(2)-②

2、屋敷がまえ

土塁を巡らした農家

2－(1)



堀を巡らした農家

2－(2)

山あいの農家

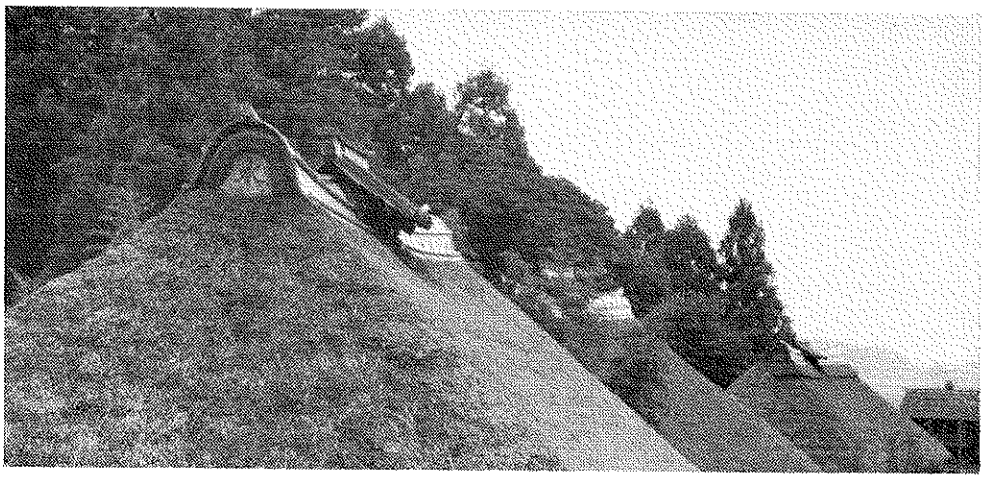
2－(3)

3、母屋の外観

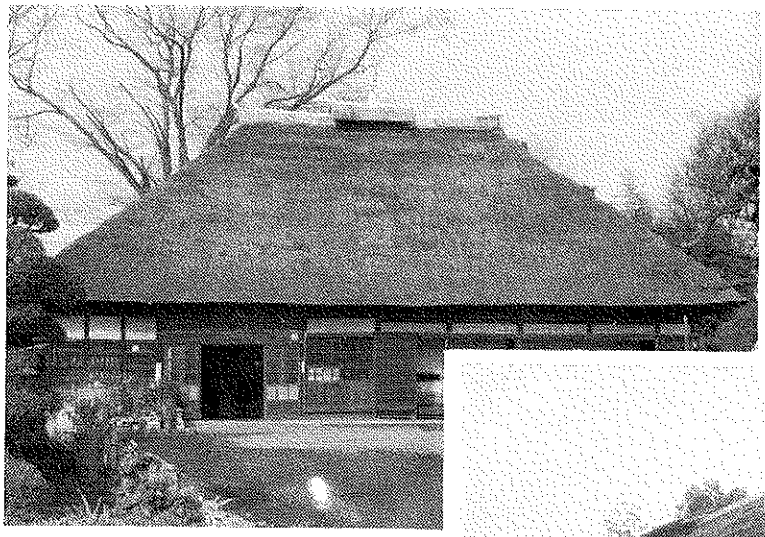
(1) 草屋根の母屋

草屋根の連なり

3－(1)－①

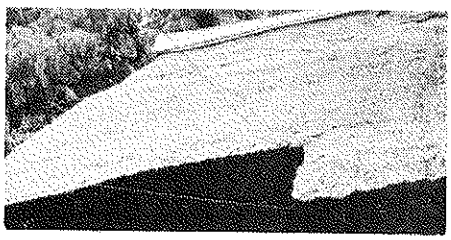


高い草屋根　3－(1)－②

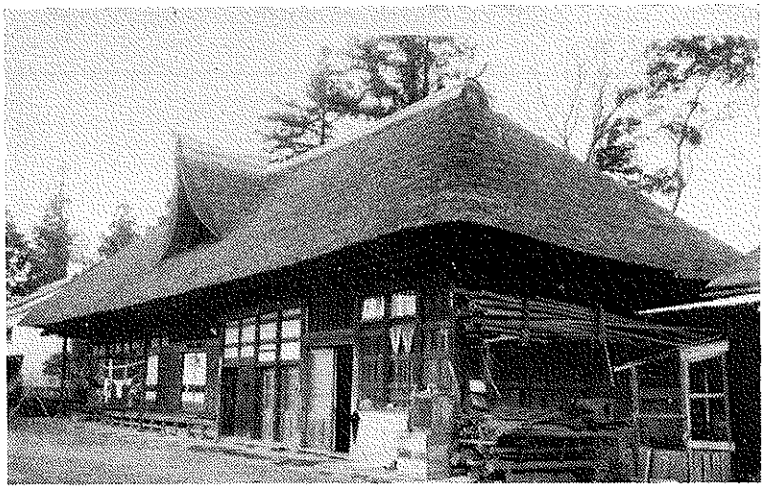


典型的な草屋根
農家　3－(1)－③

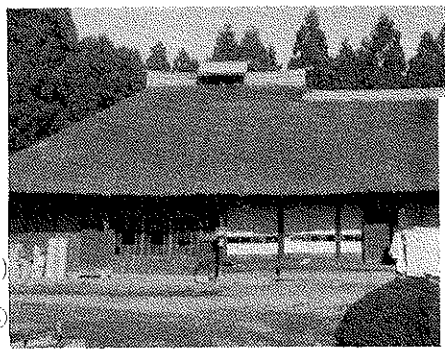
養蚕農家の草屋根　3－(1)－④



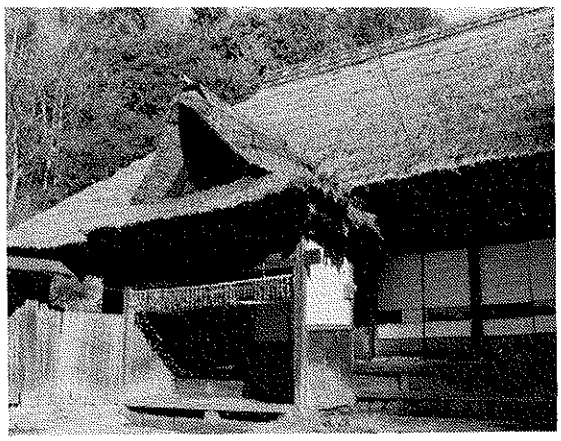
見事な破風を伴った草屋根　3－(1)－⑤



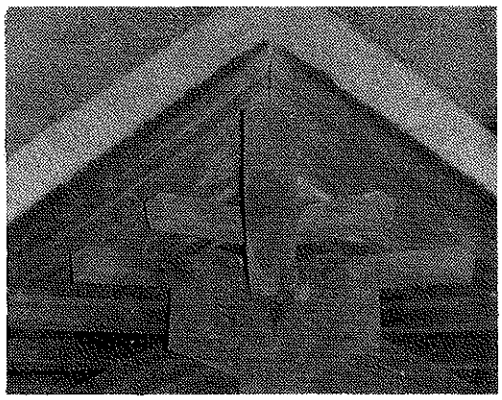
ぐしに段のある草屋根　3－(1)－⑥



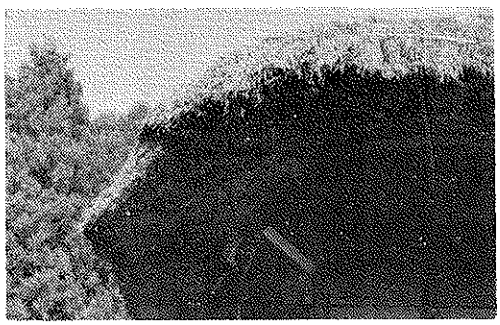
式台の上に破風を伴なった草屋根　3－(1)－⑦



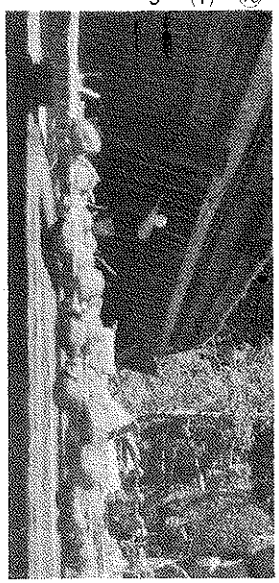
軒　端　その1　3－(1)－⑧



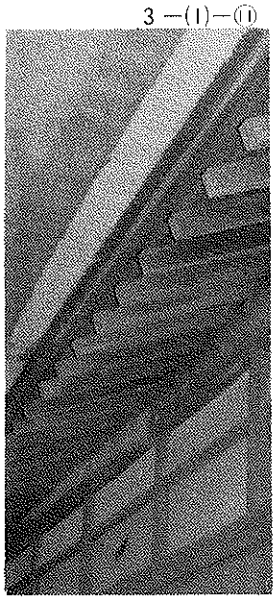
軒　端　その2　3－(1)－⑨



軒　端　その3　3－(1)－⑩



軒　端　その4　3－(1)－⑪

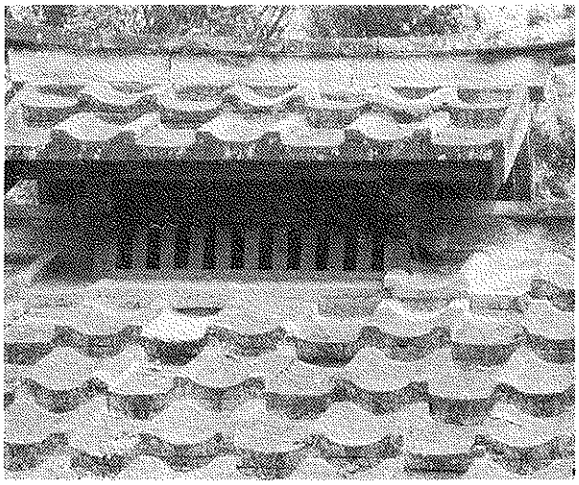


(2) 石造りの母屋

総石造りの農家

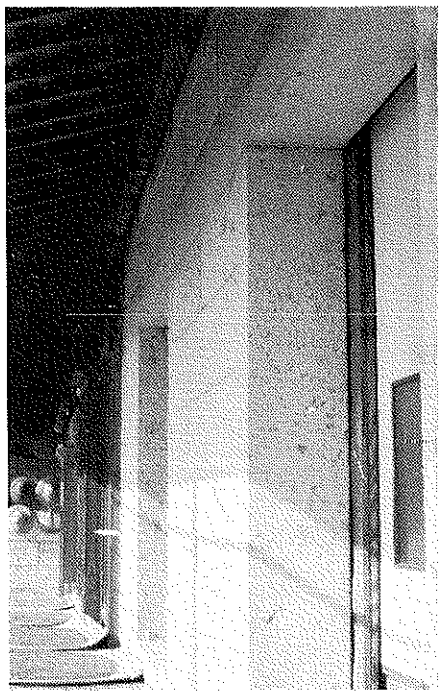
3－(2)－(1)

煙り出し　3－(2)－(3)



二階東側の窓　3－(2)－(2)

縁　側　3－(2)－(5)

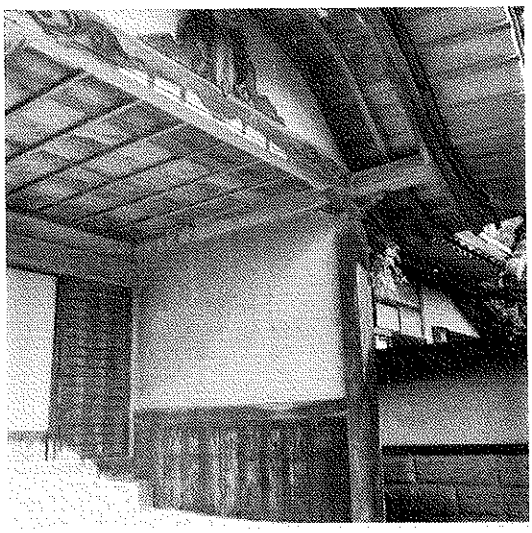


一部石造りの農家　3－(2)－(4)

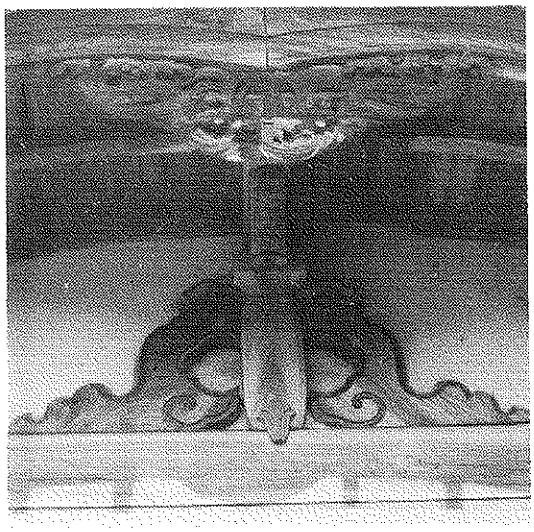
4、母屋の部分

(1) 外　　部

唐破風屋根の式台　4－(1)－①

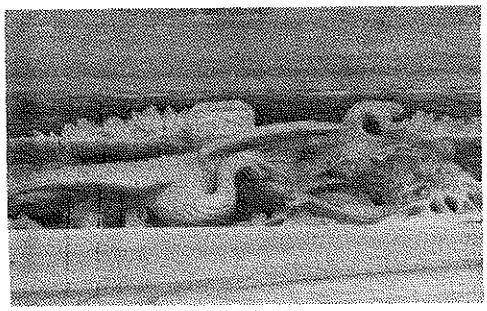


破風の意匠　4－(1)－②



式台の柱の意匠　4－(1)－③

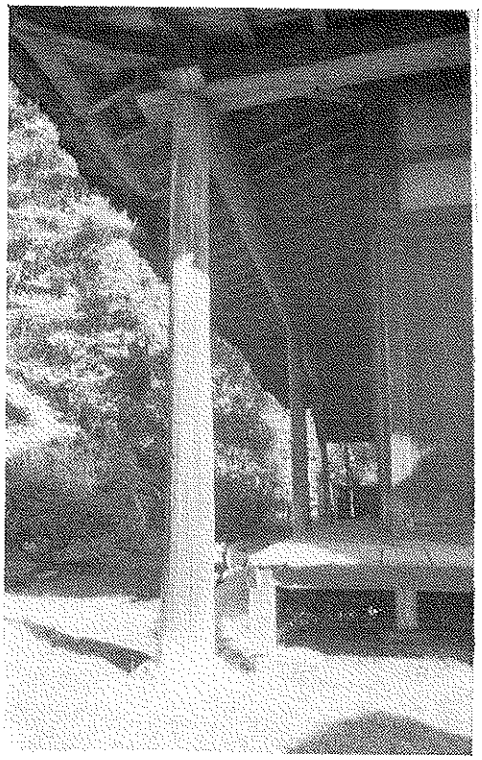
見事な彫刻　4－(1)－④



草屋根の式台　4－(1)－⑤

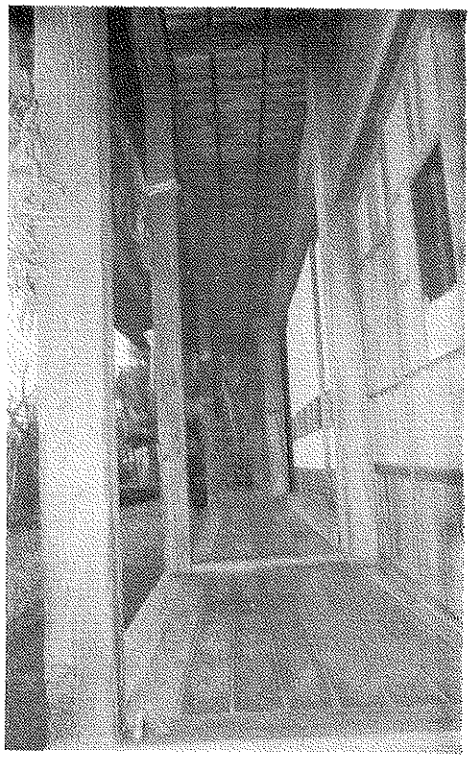
大　戸　口　4－(1)－⑥

丸い独立柱の立つ軒



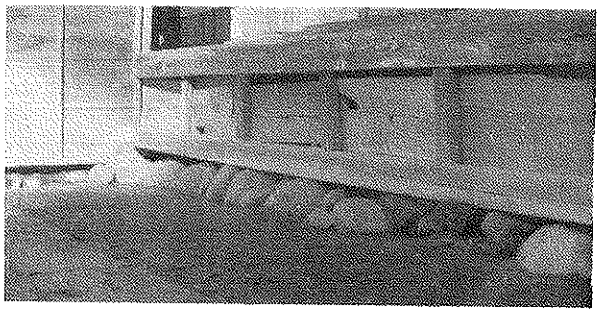
4－(1)－⑦

素朴な縁側

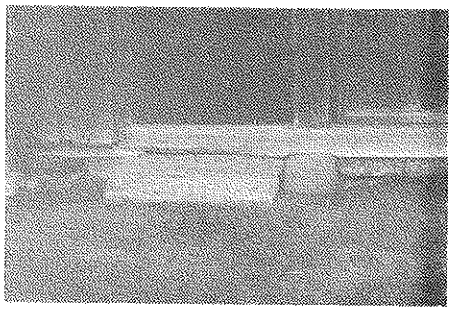


4－(1)－(8)

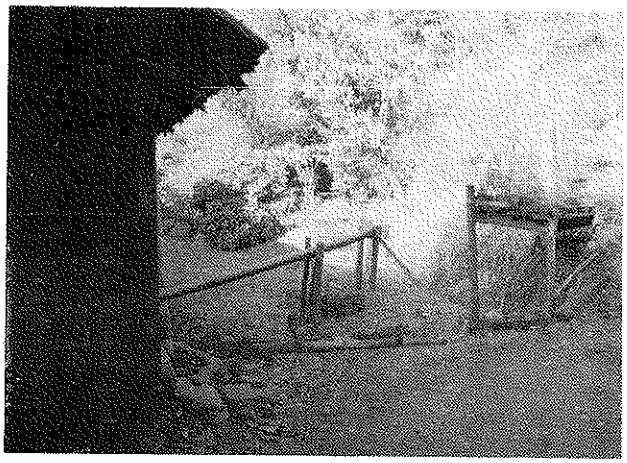
自然石の基礎　4－(1)－⑨



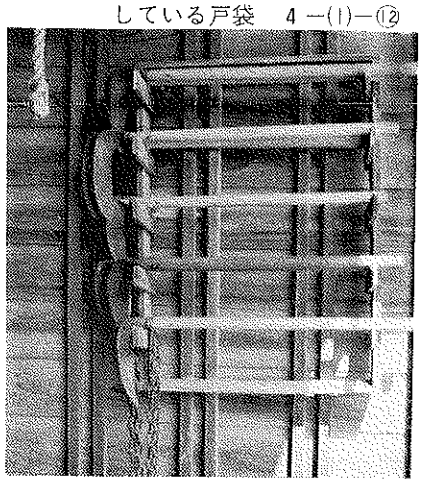
玉石の礎石　4－(1)－⑩



裏山から清水をはこぶとい　4－(1)－⑪



鎌かけに利用している戸袋　4－(1)－⑫

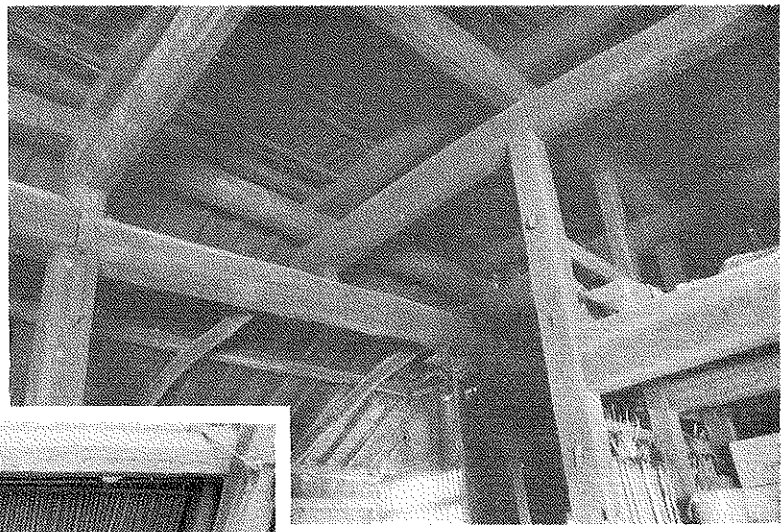


(2) 内　　部

① 梁(はり)と小屋組

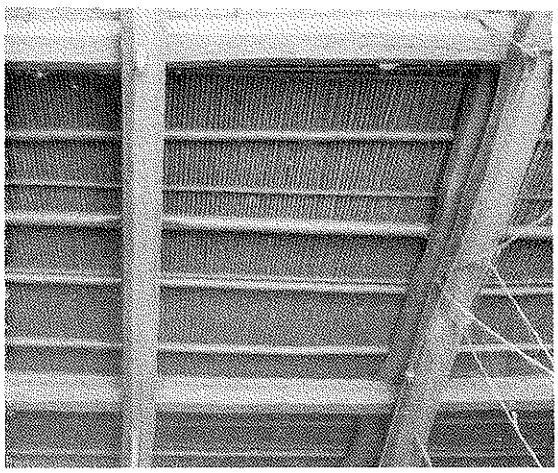
見事な梁組

4－(2)－①

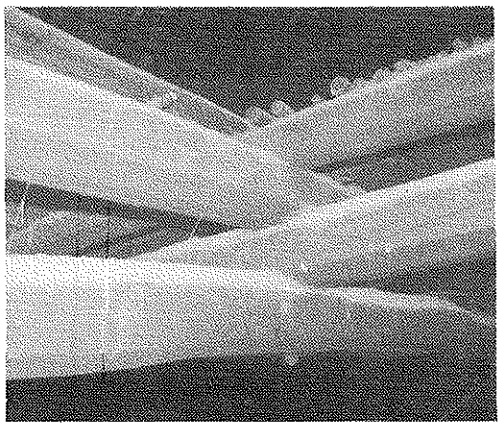


梁と竹すのこ天井

4－(2)－②

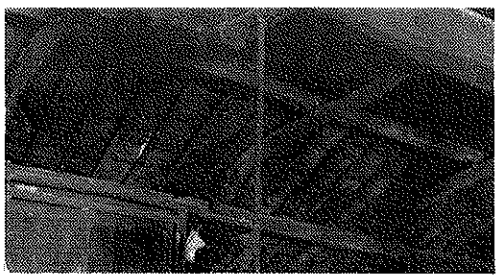


梁の交差　　4－(2)－③



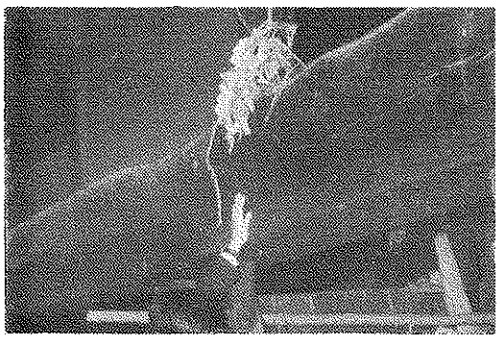
登り梁〔1〕

4－(2)－④



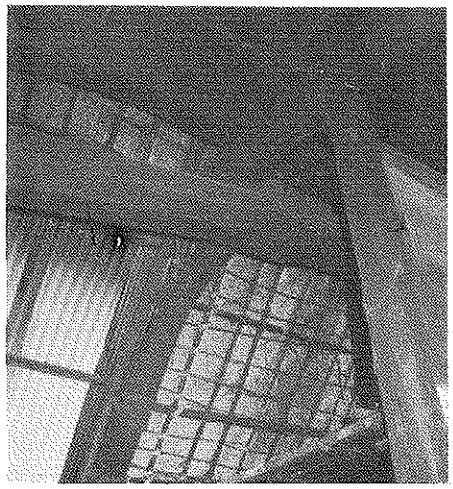
まや梁

4－(2)－⑥



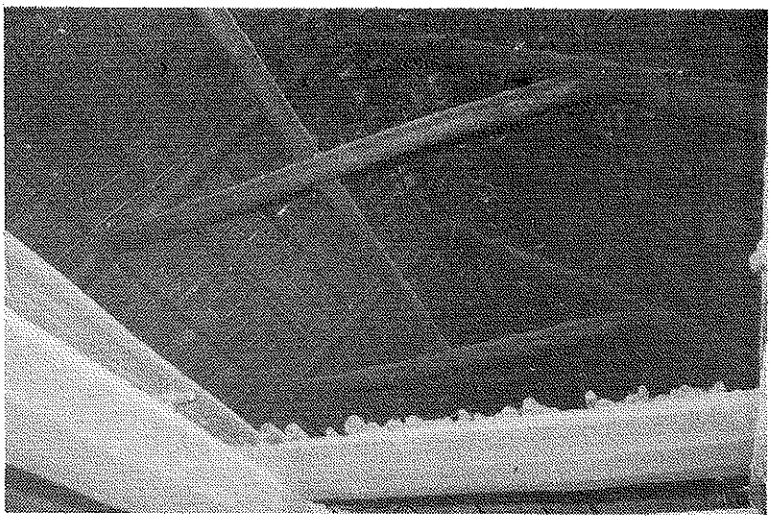
登り梁〔2〕

4－(2)－⑤

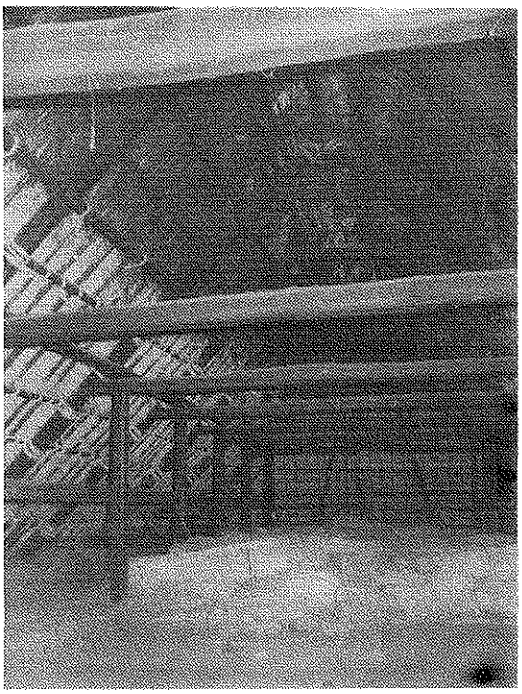


屋根裏の小屋組〔1〕

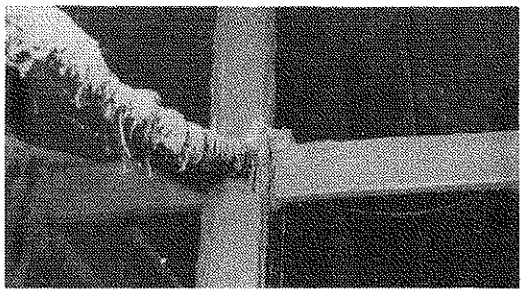
4－(2)－⑥



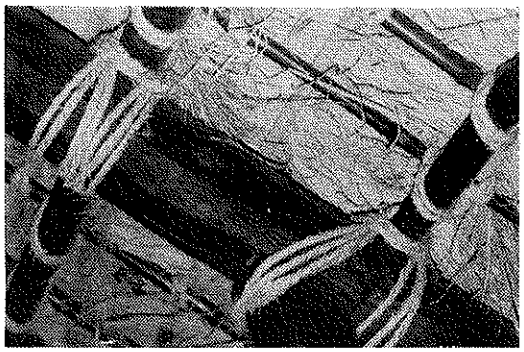
屋根裏の小屋組〔2〕　4－(2)－⑦



屋根裏の小屋組〔3〕　4－(2)－⑧

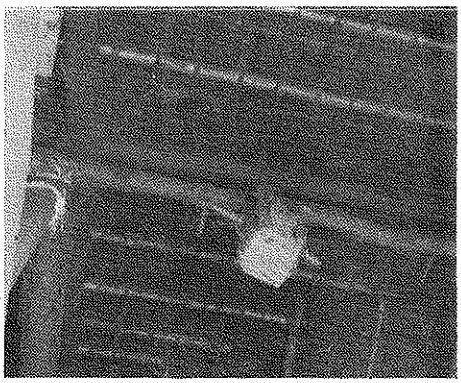


叉首（さす）と屋中竹（やなかだけ）　4－(2)－⑨

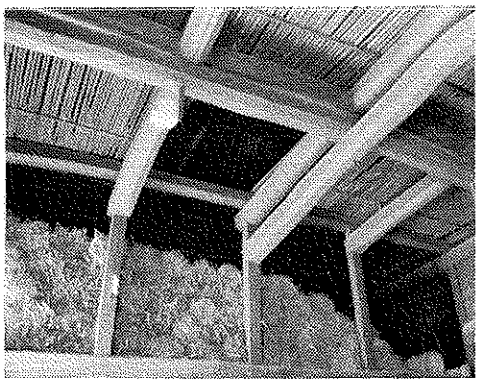


引きあげた滑車　4－(2)－⑩

屋根裏へワラなどを



まや棚のようす　4－(2)－⑪

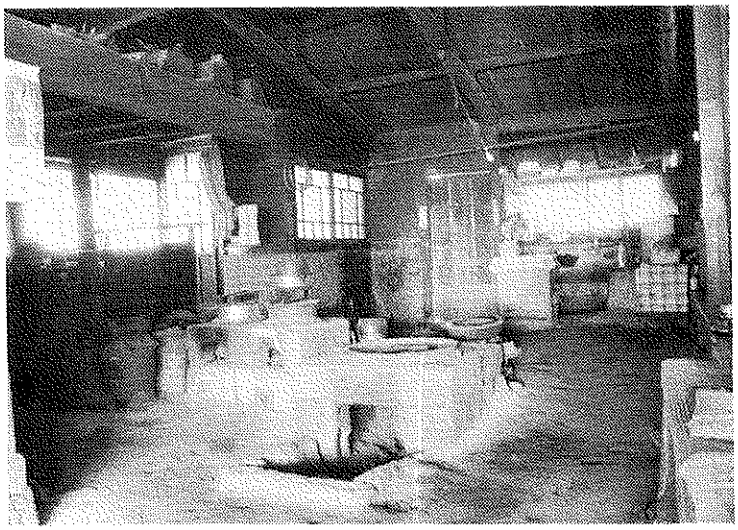


② 土間（だいどころ）といろり

土間のようす〔1〕

4－(2)－⑫

土間のようす〔2〕

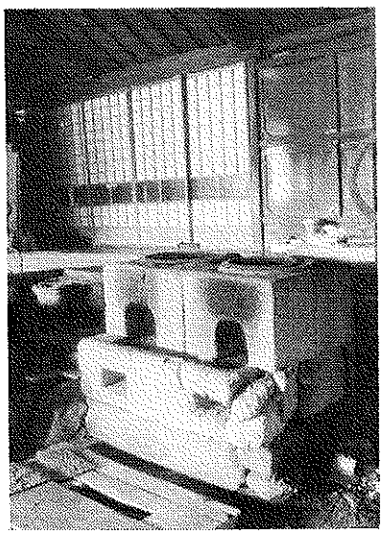


4－(2)－⑬

かまどのようす〔1〕

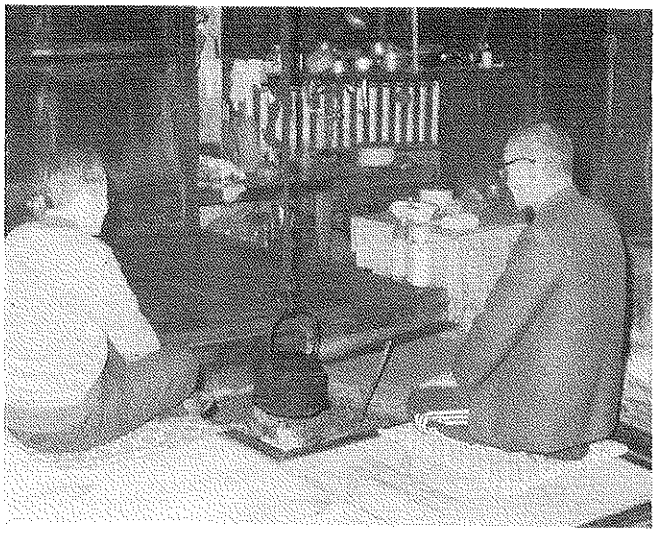
4－(2)－⑭

かまどのようす〔2〕

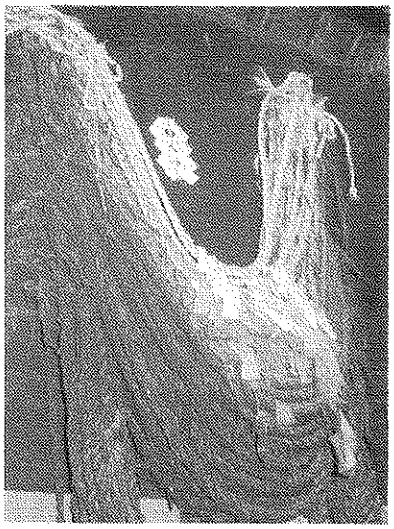


4－(2)－⑮

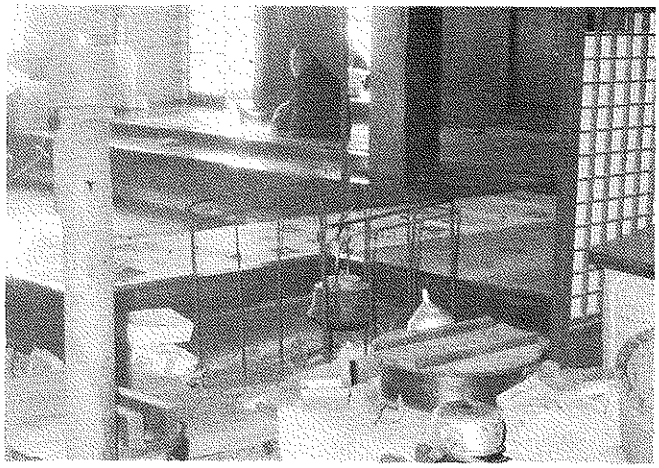
いろり〔1〕　4－(2)－⑯



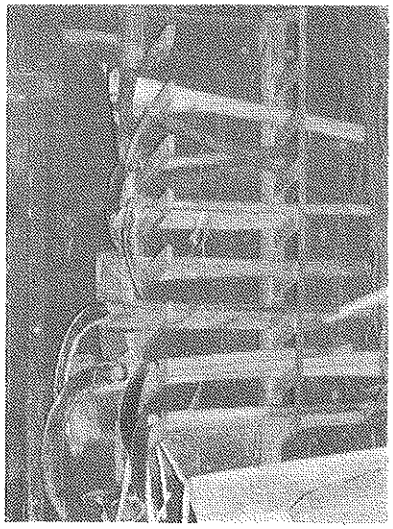
お釜様　4－(2)－⑰



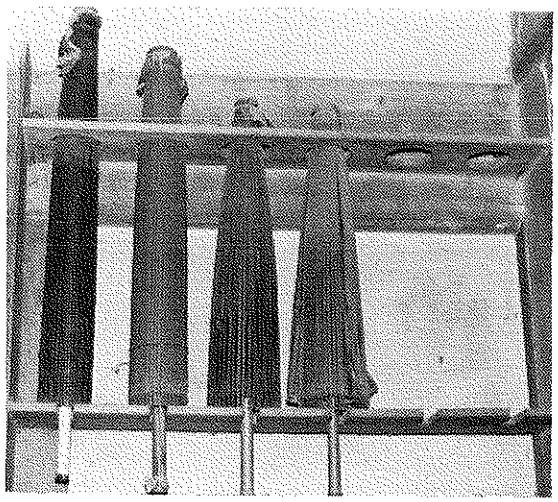
いろり〔2〕　4－(2)－⑲



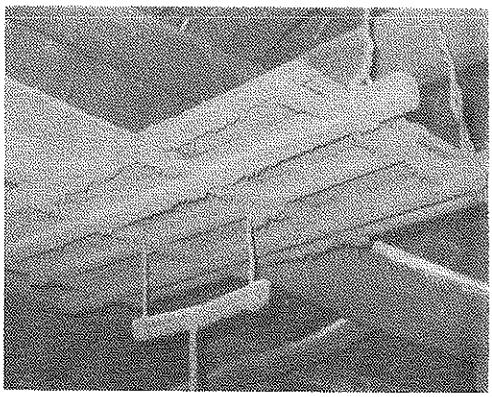
壁面の利用〔1〕　4－(2)－⑱



壁面の利用〔2〕　4－(2)－㉑

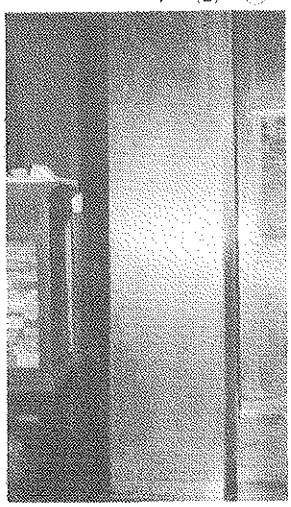


火棚　4－(2)－⑳



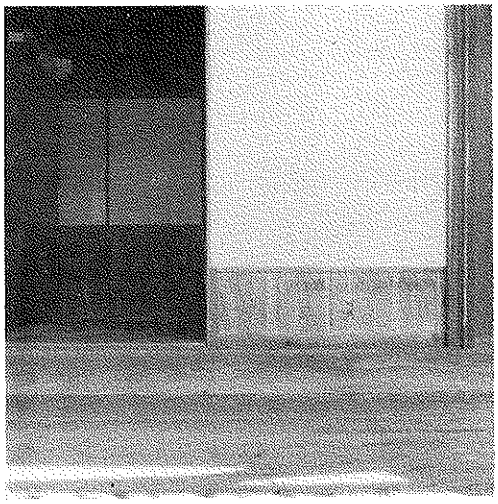
③ 部屋と間取り

ハリギリの大黒柱　4 ―(2)―㉒

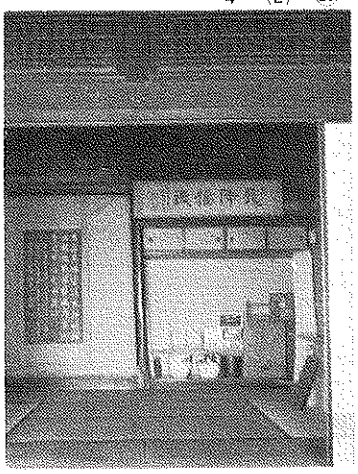


ケヤキの大黒柱　4 ―(2)―㉓

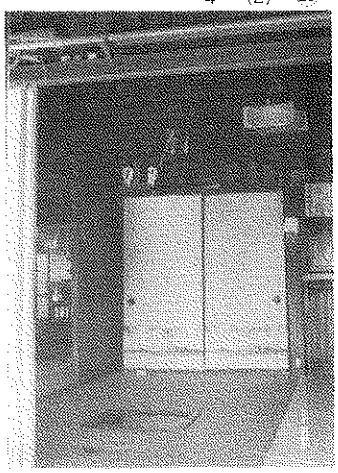
式台から玄関の間を望む　4 ―(2)―㉔



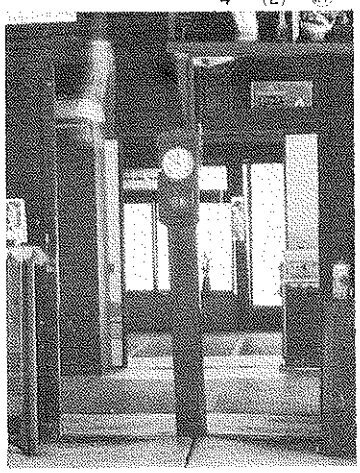
座敷から奥座敷を望む　4 ―(2)―㉕



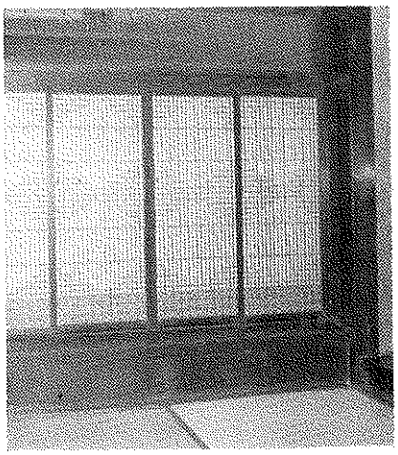
廊下から茶の間を望む　4 ―(2)―㉖



茶の間から中の間・座敷を望む　4 ―(2)―㉗

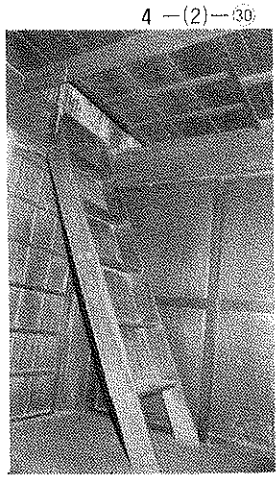


座敷の附書院　4 ―(2)―㉘



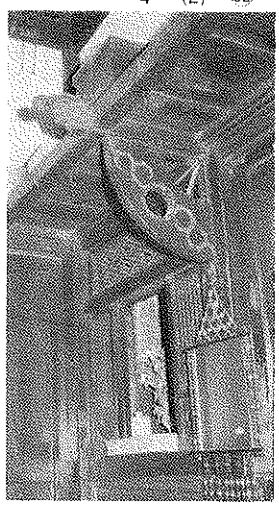
座敷の鴨居となげし 4 ―(2)―㉙

根太天井とはしご　4 ―(2)―㉚

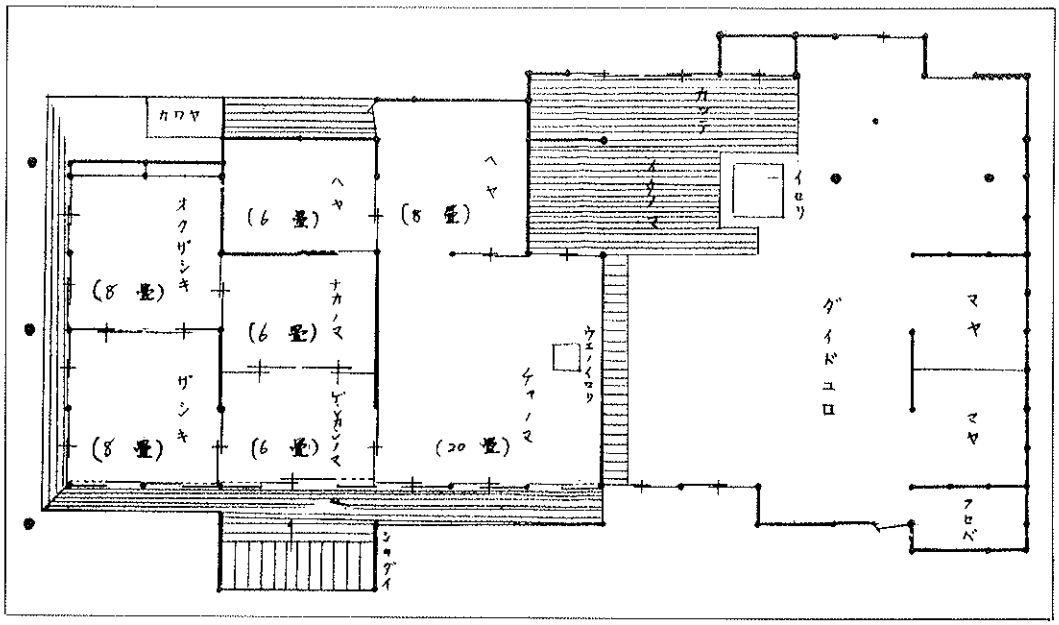


茶の間の神棚　4 —(2)—㉛

茶の間の仏壇　4 —(2)—㉜



間　取　り　図　4 —(2)—㉝



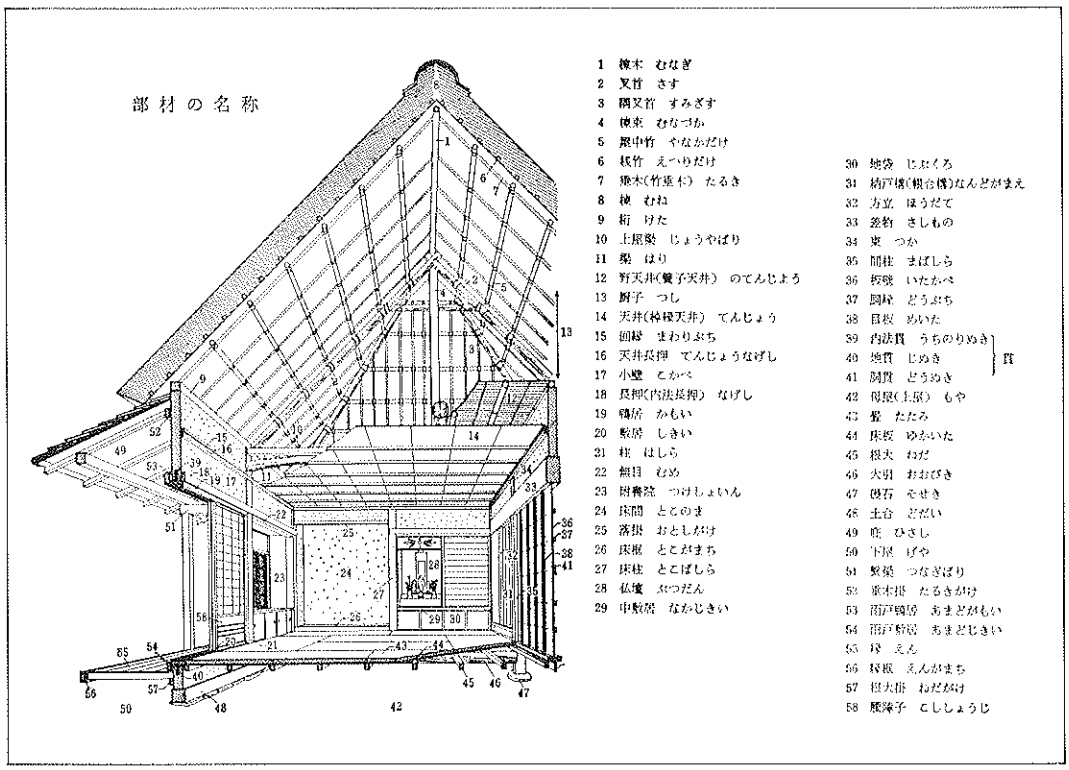
II の注

- II —①、②　「日本の民俗—栃木—」（尾島利雄著）より
- I —(1)—①　横山町
- I —(1)—②　飯山町
- I —(2)—①　幕田町
- I —(2)—②　下桑島町
- 2 —①　釜井氏宅（平出町2516）
- 2 —②　小堀氏宅（瓦谷町41）
- 2 —③　斉藤氏宅（飯山町765）
- 4 —(1)—⑥、⑱
- 3 —(1)—①　瓦谷町
- 3 —(1)—②　宇梶氏宅
- 4 —(2)—⑤　（下栗町418）
- 3 —(1)—③、⑪　鈴木氏宅（下小池町231）

4 —(1)—⑧
4 —(2)—⑦
⑨、㉘、㉚
㉜

- 3 —(1)—④　菊地氏宅
（石井町2146）
- 3 —(1)—⑤　半田氏宅
（岩曽町137）
- 3 —(1)—⑥　半田氏宅
⑨　（新里町丁838）
4 —(2)—⑬、
㉖、㉗
- 3 —(1)—⑦、根本氏宅
⑧　（瓦谷町16）
4 —(1)—⑤
⑦、⑨、⑩、
⑪
4 —(2)—①、
④、⑧、⑫、
⑮、⑯、⑳、
㉔、㉕、㉙、
㉝

- 3 —(1)—⑩　岡田氏宅
4 —(2)—②、（砥上町600）
③、⑥、⑪、
⑬、⑰
- 3 —(2)—①、池田氏宅
②、③　（徳次郎町1182）
- 3 —(2)—④、安達氏宅
⑤　（新里町乙335）
- 4 —(1)—①、高橋氏宅
②　（新里町丁511）
- 4 —(1)—③、大江氏宅
④　徳次郎町1776）
- 4 —(1)—⑫、高橋氏宅
4 —(2)—㉑、（瓦谷町1120）
㉛
- 4 —(2)—⑥、鈴木氏宅
⑩、⑲、㉓　（下桑島町650）
- 4 —(2)—㉒　福田氏宅
（飯田町921）



Ⅲ、門　と　蔵

伝えられている門　Ⅲ－①
宇都宮城の今小路門と

本陣跡に残る　いちょうと土蔵　Ⅲ－②

江戸時代において門の有無は、身分や家格を象徴するものであり今日も、その名残がみられる。

宇都宮に現存する門で圧倒的に多いのは、門の両脇を物置や使用人の部屋にした長屋門である。

次に多いのは、武士の住宅に設けられたという薬医門であり、冠木（かぶき）門等もみられる。

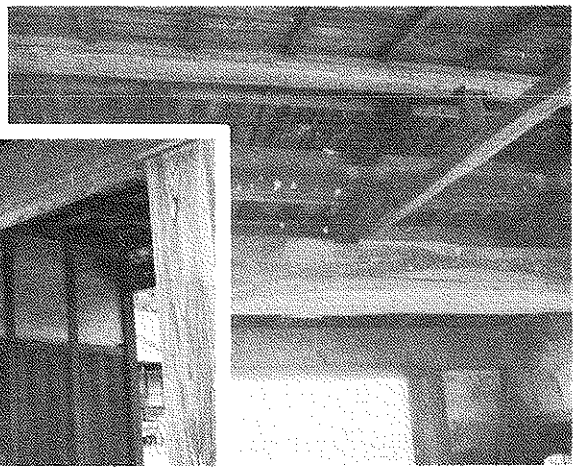
門と同じように身分や富を象徴するものとして蔵がある。宇都宮の蔵の特色としては大谷石を用いた石蔵が多いことである。石蔵以外にも、市街地を中心とした商家には土蔵がみられる。また、農家には、数は少ないが板倉も所々に残っている。

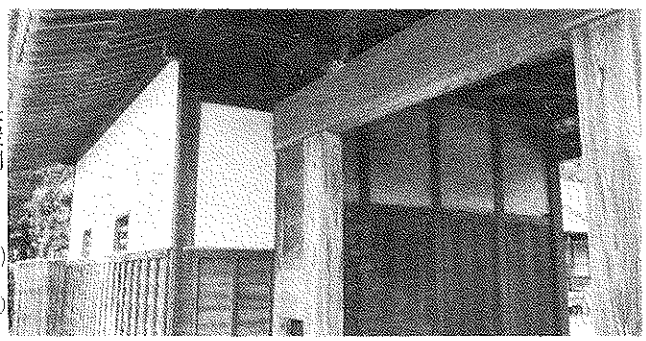
1、堂々とした門構え

(1) 長　屋　門

入母屋屋根の長屋門　Ⅰ－(1)－①

長屋門の梁（はり）組　Ⅰ－(1)－③

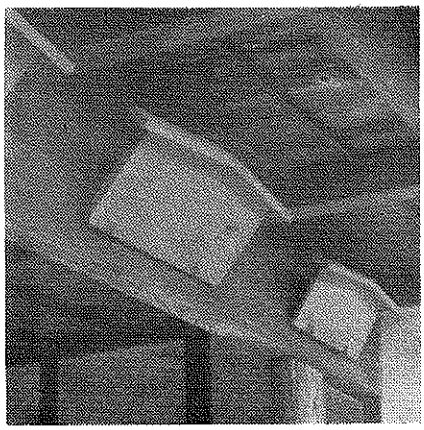




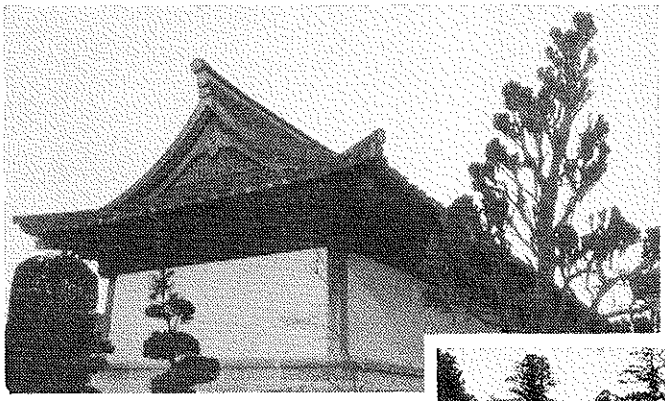
桁（けた）の上に斗供がみえる　長屋門　Ⅰ－(1)－②

素朴な構えの長屋門　　Ⅰ―(1)―④

高札を掲げた桁（けた）　　Ⅰ―(1)―⑤



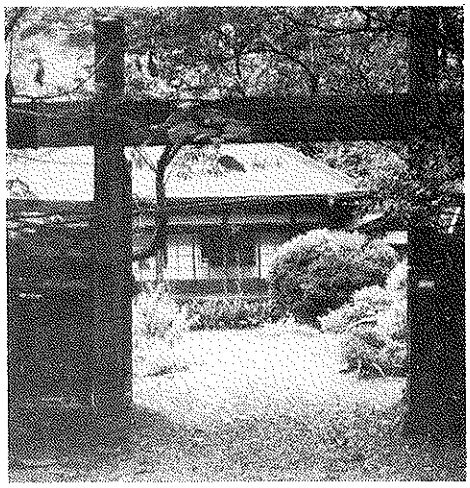
破風の美しい石屋根　　Ⅰ―(1)―⑥



石屋根の長屋門　　Ⅰ―(1)―⑦

(2) 冠　木　門

趣きのある冠木門　Ⅰ―(2)―①

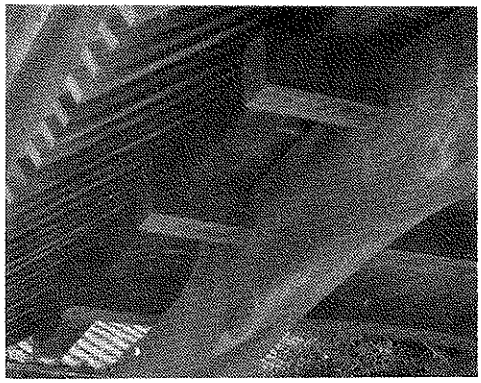


改造された冠木門　Ⅰ―(2)―②

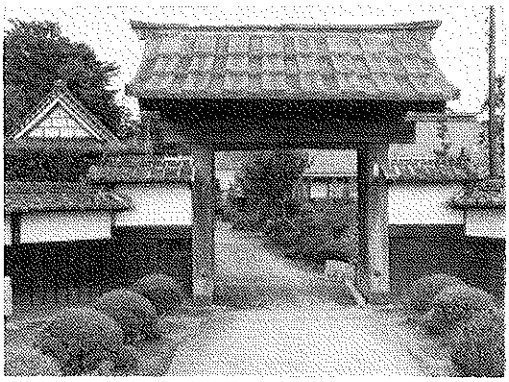
(3) 薬 医 門

美しい瓦屋根の門　Ⅰ—(3)—①

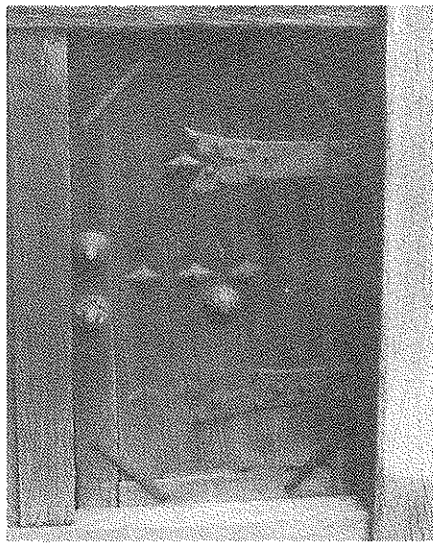
曲線を生かした桁（けた）　Ⅰ—(3)—②



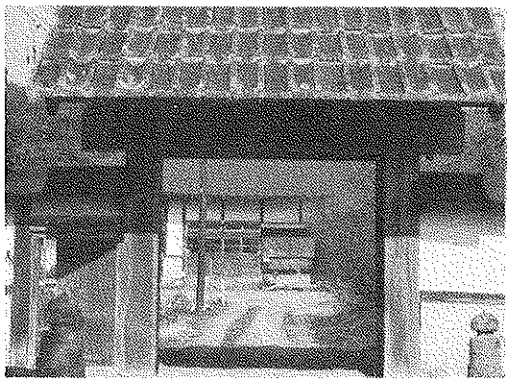
均整のとれた門　Ⅰ—(3)—③



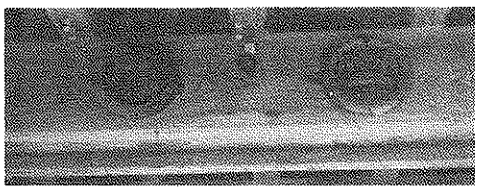
くぐり戸　Ⅰ—(3)—④



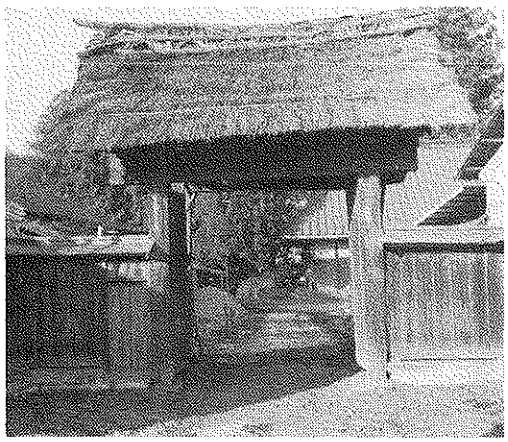
石屋根の門　Ⅰ—(3)—⑤



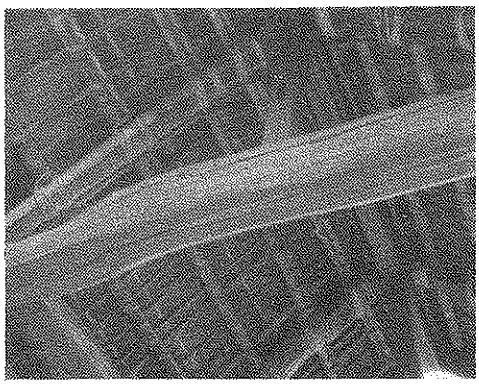
桁に取り付けられた絞　Ⅰ—(3)—⑥



草屋根の門　Ⅰ—(3)—⑦



門の小屋組　Ⅰ—(3)—⑧



2、富を象徴した蔵

蔵の連なり

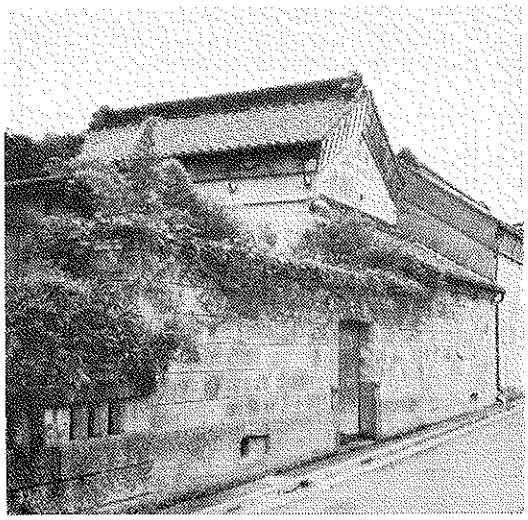
2－①

商家の裏にならぶ土蔵群　2－②

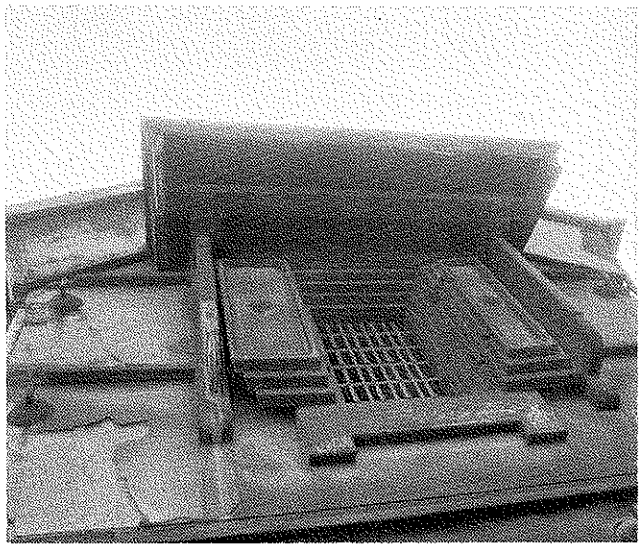
旧本郷町に残る土蔵　2－③

旧伊賀町に現存する味噌蔵　2－④

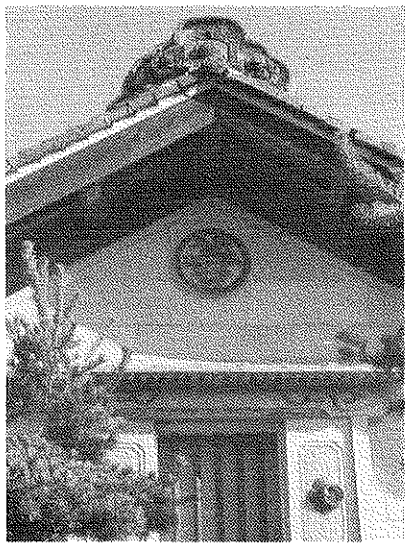
住宅地の中にただずむ蔵　2－⑤



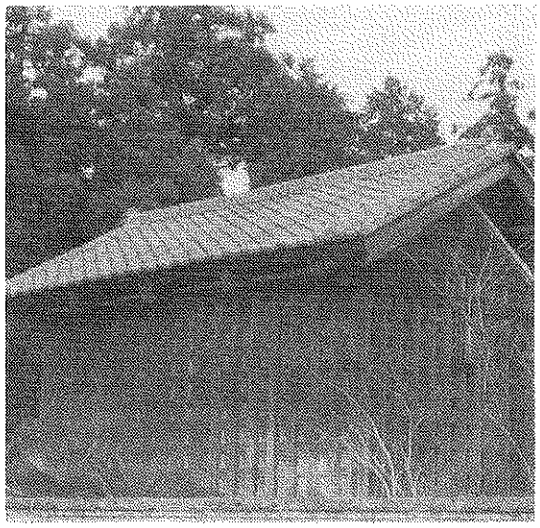
観音開きの窓のある土蔵　2－⑥



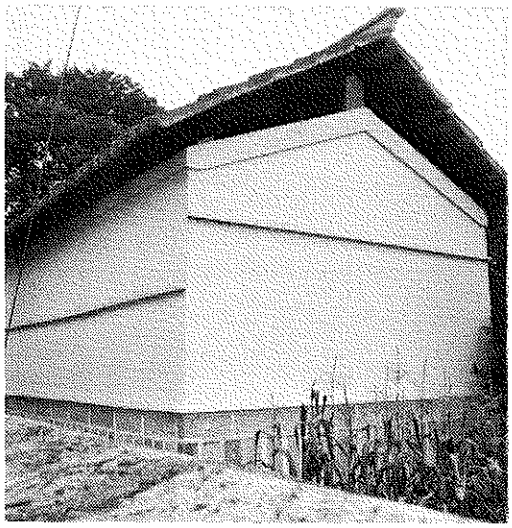
見事な鬼瓦をのせた蔵　2－⑦



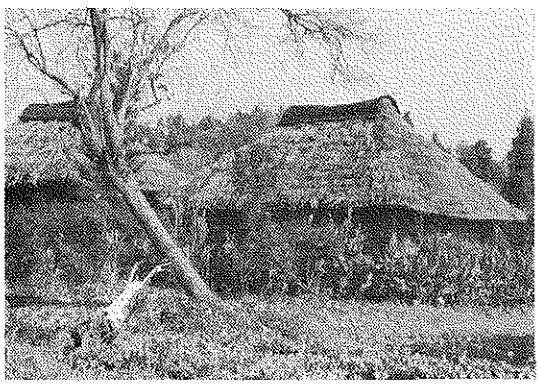
木の美しさをみせる板倉　2－⑧



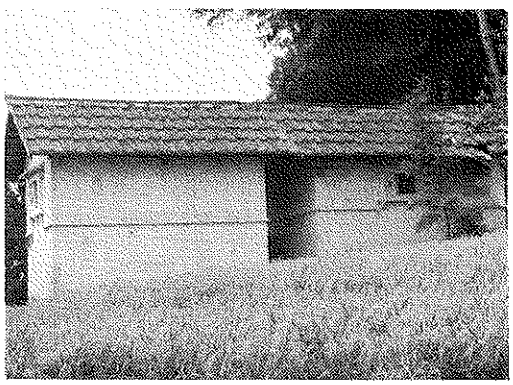
直線の石屋根が美しい蔵　2－⑨



草屋根の納屋　2－⑩

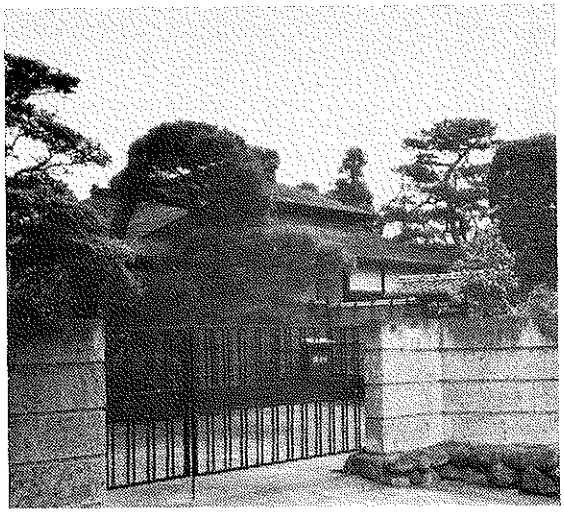


屋根が接続している石蔵　2－⑪

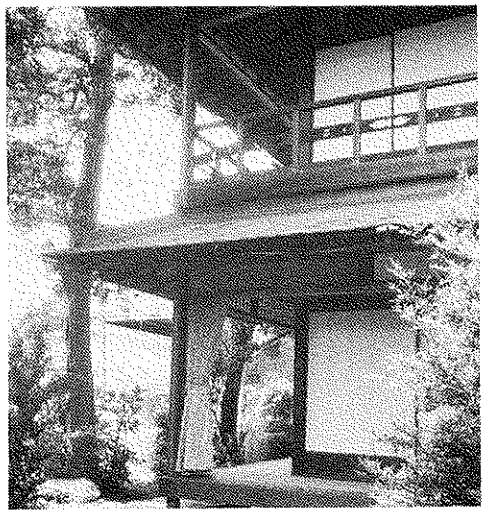


Ⅳ、その他代表的建物

武家屋敷の名残をとどめる住宅　①



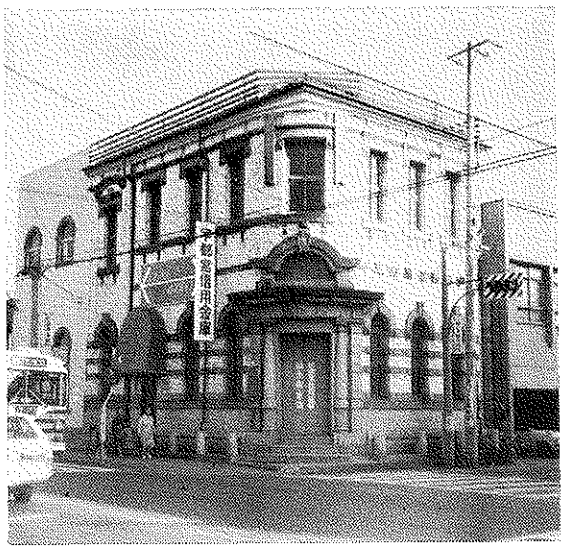
書院造り風の住宅　②



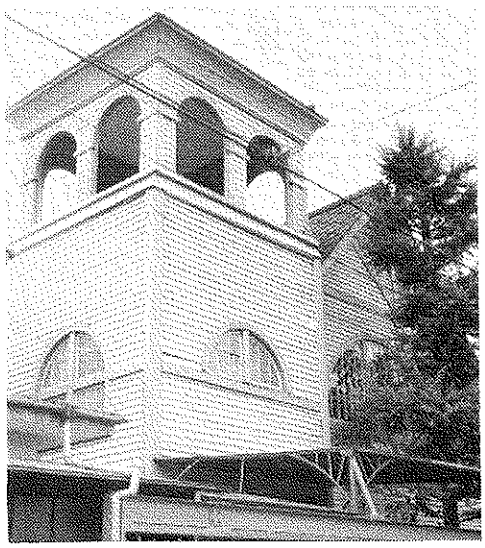
ふすまと和だんす　③

床の間　④

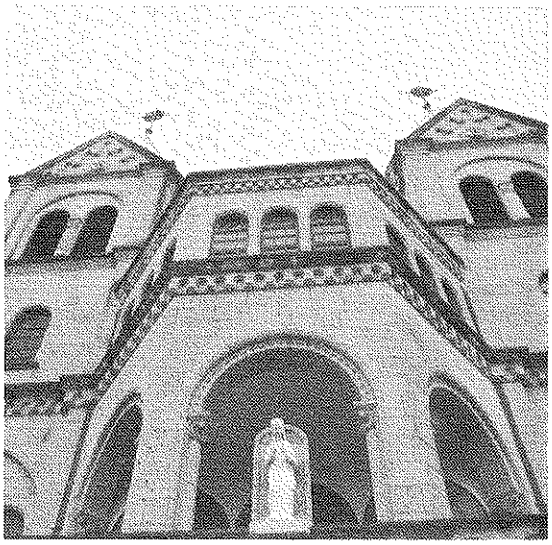
趣のあるタイル張りの建物　⑤



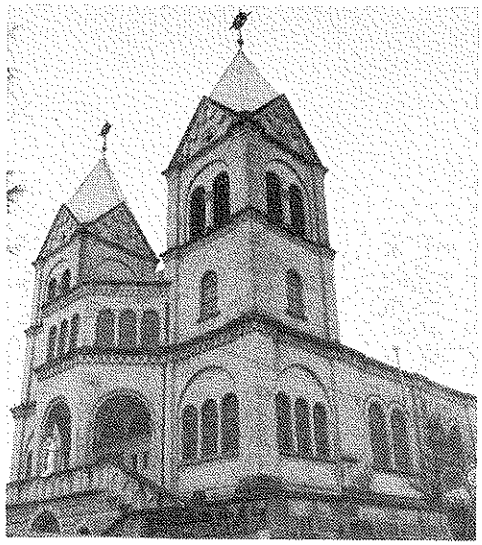
宇都宮最古の教会　⑥



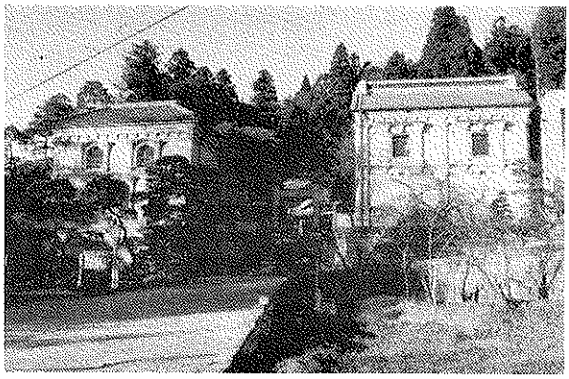
大谷石造りの
宇都宮を代表する教会〔1〕 ⑦



同〔2〕 ⑧

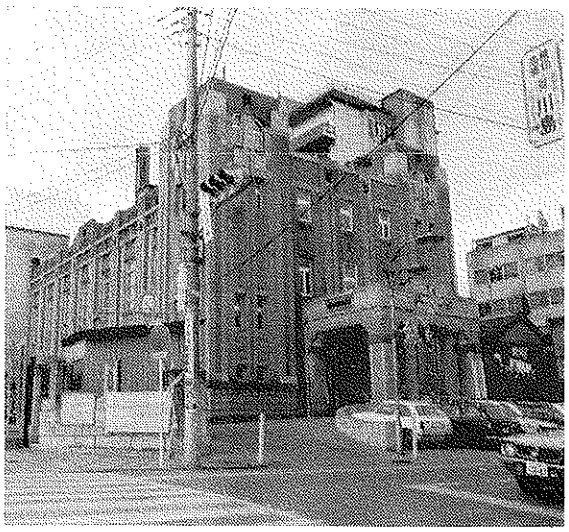


細工をこらした
大谷石造りの建物〔1〕 ⑨

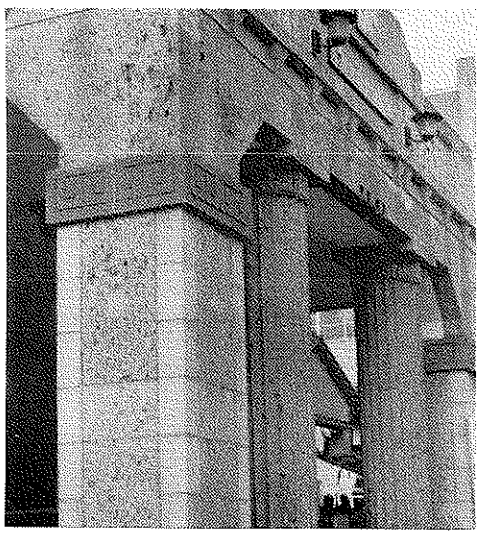


同〔2〕 ⑩

宇都宮を代表する
大谷石造りの建物〔1〕 ⑪



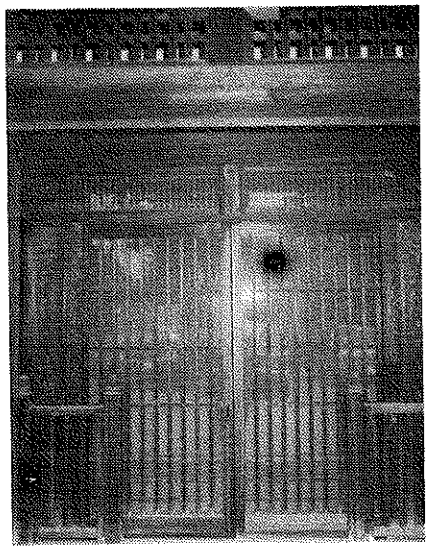
同〔2〕 ⑫



知事公社

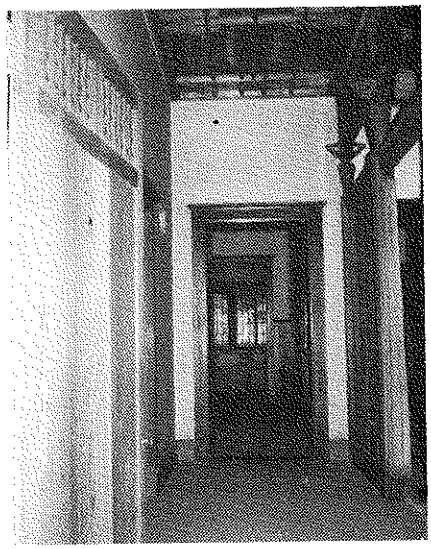
堂々とした玄関 ⑬

玄関の意匠 ⑭

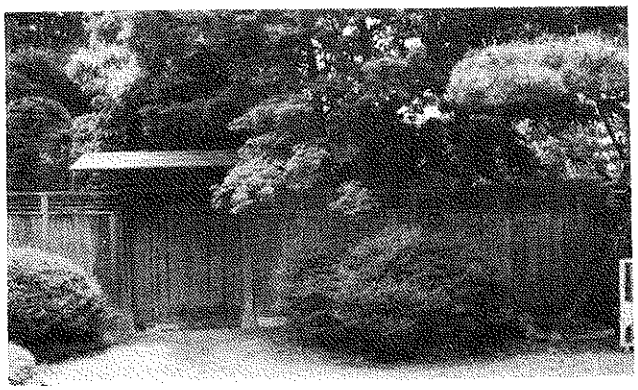


木々に囲まれた洋館 ⑮

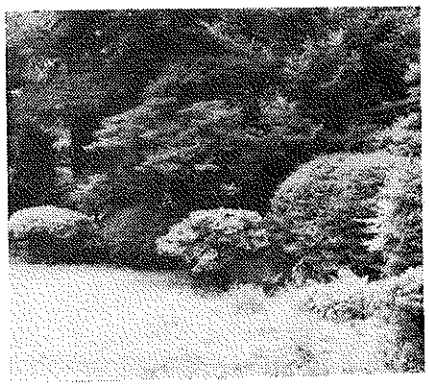
中廊下のようす ⑯



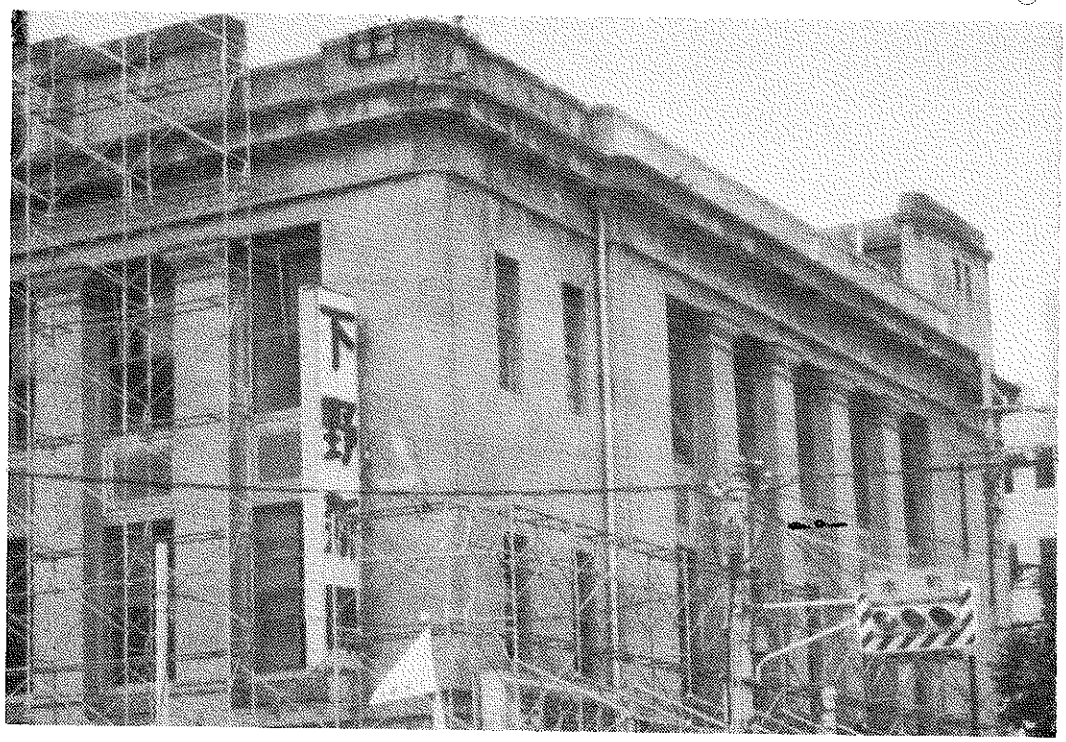
外から庭園を望む ⑰



庭園内部のようす ⑱



宇都宮の象徴的建物であったビル ⑲



III・IVの注

- III－①　金田氏宅（瓦谷町30）
- I－(1)－①　秋山氏宅（長岡町13）
- I－(1)－②　篠原氏宅（東谷町364）
- I－(1)－(4)、⑤　植木氏宅（下砥上町1159）
- I－(1)－⑥、⑦　黒崎氏宅（鶴田町1641）
- I－(2)－①　芝野氏宅（上籠谷町855）
- I－(2)－②　声谷氏宅（雀宮３－306）
- I－(3)－①、②　田崎氏宅（東刑部町1198）
- I－(3)－③、④　竹村氏宅（柳田町291）
- I－(3)－⑤、⑥　高橋氏宅（新里町丁511）
- 2－③－⑦、⑧　宇賀神氏宅（下欠町658）
- 2－①　石那田町
- 2－②　田野氏宅（小幡１－３）
- 2－③　村山氏宅（小幡１－２）
- 2－④　中村氏宅（西原１－１）
- 2－⑤　田中氏宅（西１－５）
- 2－⑥　山中氏宅（馬場通り１－１）
- 2－⑦　小堀氏宅（瓦谷町46）
- 2－⑧　佐藤氏宅（上戸祭町336）
- 2－⑨　小堀氏宅（徳次町2256）
- 2－⑩　半田氏宅（新里町丁1463）
- 2－⑪　福田氏宅（横山町580）
- ①　中山氏宅（西１－３）
- ②、③、④　福田氏宅（西１－３）
- ⑤　宇都宮信用金庫・材木町支店（伝馬町４）
- ⑥　日本キリスト教団・四条町教会（西３－５）
- ⑦、⑧　松ヶ峰カトリック教会（松ヶ峰１－１）
- ⑨、⑩　渡辺氏宅（大谷町1088）
- ⑪、⑫　宇都宮商工会議所（中央本町４）
- ⑬～⑱　知事公舎（昭和１－１）
- ⑲　下野新聞社（本町４）

あ と が き

「宇都宮の民俗」に続いて、文化財シリーズ第２号として「宇都宮の民家と屋並」を発刊することになりました。

家の形は、生活様式の変化とともに移り変って行くものです。

したがって、古い時代の家が消滅して行くことは、いたしかたないことといえるでしょう。

しかし、急速に姿を消しつつある郷土の伝統的家屋をみるにつけ、保存がむりならせめて記録にとどめておきたいということから本冊子を編集しました。

本冊子は、一応、宇都宮の代表的民家および屋並をもりこんだつもりですので、伝統的家屋の理解とともに郷土全体の認識を深めるのに幾分でも役立ったならば、編集に携わった者としてこのうえない喜びとするところです。

なお、文化財シリーズ第３号として「宇都宮の手仕事」を発刊する予定です。

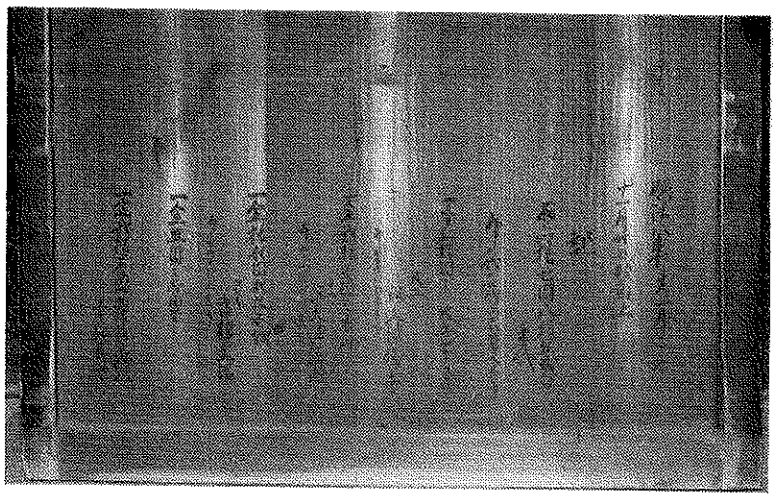
昭和５４年３月

編集責任者

宇都宮市教育委員会

社会教育課長　半　田　　昭

軒　下　　（寺内氏宅・茂原町562）



板戸の裏に記録されている普請費用　　（鈴木氏宅・下小池町231）

昭和54年３月20日　印　刷
昭和57年３月25日　第３刷
昭和54年３月25日　発　行

宇都宮の民家と屋並

発行所　宇都宮市教育委員会
編　集　宇都宮市教育委員会社会教育課
印刷所　㈲　イ　リ　サ　ワ　商　事

（表紙題字・桜井敬朔）

文化財愛護
シンボルマーク

文化財シリーズ第2号